平成28年度　滝川市道徳教育推進事業　実践報告書

「児童生徒の心に響く道徳科の授業の在り方」

～自己と他者の心を見つめて～

滝川市教育委員会
滝川市道徳教育研究会議

発　刊　に　あ　た　っ　て

道徳教育は今、大きな変化を迎えようとしています。平成２７年３月に告示された一部改正学習指導要領に基づき、各学校においては「道徳科」に係る移行期間における取組が実施されております。今回の一部改正の背景には「いじめ問題等への対応」と「自立した一人の人間として他者とともによりよく生きる人格の形成」が強く求められています。すなわち、学校における道徳教育は、道徳科の授業を「要」として、学校の教育活動全体を通じて組織的・継続的に行われるものであり、さらには「私たちの道徳」などを活用した家庭や地域の協力が今以上に不可欠となります。

本市においては、平成１９年度から、道徳教育の充実、とりわけ道徳の時間の指導の充実を通して、子どもたちの豊かな心の育成を図る取組を進めてまいりました。平成１９年度から２年間は文部科学省の指定を受け、平成２１年度から平成２６年度にかけては、それぞれ２か年計画で滝川市独自に「道徳教育推進事業」を立ち上げて実践的な研究を推進してきたところです。

昨年度から、これまでの研究成果を引き続き「深める、広げる」とともに本市の道徳教育の一層の充実を図るため、３か年計画で道徳教育の要となる「道徳科の授業」に係る実践研究を推進してまいりました。８回の研究会議を開催し、各学校から選出された道徳教育研究員による理論研究と３校における研究授業を通して、子どもたちの心に響き、自らの心・他者の心へ想いを寄せる道徳教育の充実について研究を深めることができました。

本報告書には、研究主題に基づいた研究理論・授業実践等、研究の取組の成果が掲載されております。各学校において本書が有効に活用され、子どもたちに、自己の生き方について自分なりの考えをもち、主体的に行動しようとする心が一層醸成されることを願っております。

終わりになりますが、本研究事業の推進にあたり、ご協力いただきました研究員の先生方、関係各位に心からお礼を申しあげ、発刊にあたってのご挨拶といたします。

平成２９年　３月　　滝川市教育委員会教育長　山　﨑　　猛

目　　次

発刊にあたって

第１章　研究概要

Ⅰ．研究主題及び主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
Ⅱ．目指す子ども像　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
Ⅲ．研究仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
Ⅳ．研究内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
Ⅴ．研究の全体構造図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
Ⅵ．事業及び研究の進め方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

第２章　研究理論

Ⅰ．心に響く教材の開発・活用の工夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
Ⅱ．言語活動の充実を図る指導方法の工夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
Ⅲ．保護者や地域の方などの支援を得た指導の工夫　・・・・・・・・・・・・・・１７

第３章　平成２８年度授業実践

・滝川市立江部乙小学校　　倉　本　昌　和　教諭　・・・・・・・・・・・・・・２０
・滝川市立滝川第三小学校　惣　戸　信　明　教諭　・・・・・・・・・・・・・・２６
・滝川市立江部乙中学校　　丸　山　治　樹　教諭　・・・・・・・・・・・・・・３１
・各授業実践の反省　～各研究協議より～　・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９

第４章　成果と課題

・平成２８年度　研究の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３

参考・引用文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５１

第１章

研究概要

Ⅰ　研究主題及び主題設定の理由

1　研究主題

「児童生徒の心に響く道徳科の授業の在り方」
～自己と他者の心を見つめて～

2　研究主題設定の理由

近年、児童生徒に生命を大切にする心や思いやりの心、倫理観や規範意識、忍耐力、社会性などを育成することが課題となっており、学校、家庭、地域社会が十分に連携を図りながら、児童生徒に豊かな人間性や社会性をはぐくむ道徳教育を充実することが求められている。

とりわけ、生命の尊さを感じとり、生命をかけがえのないものとして大切にする心の育成とともに、身のまわりの人、集団そして社会とのかかわりを大切にし、望ましい人間関係の育成を図ることは緊要な課題である。

児童生徒に、生命を尊重する心や自立した人間として他者とともによりよく生きようとする心をはぐくむためには、生きていることの素晴らしさや喜びを味わわせ、生きがいをもたせるとともに、生命や自然に対する畏敬の念を培い、自他の生命の尊重や動植物をいつくしむ心を人間としての生き方の根源としてとらえ、その在り方について具体的な場を通して考えさせる必要がある。

これらのことから、本研究では、研究主題を「児童生徒の心に響く道徳科の授業の在り方」と設定し、児童生徒の心に響き、自らの心、他者への心へ想いを寄せる道徳教育の充実について研究をすることとした。

Ⅱ　目指す子ども像

本研究では、児童生徒に、①自己の生き方について自分なりの考えをもち、主体的に判断し、行動しようとする心　②他者を思いやり、他者との関係を大切にする心を育成する観点から目指す子ども像を、

「自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動する子ども」

と設定する。

Ⅲ　研究仮説

上記の「目指す子ども像」を踏まえ、研究仮説を次のように設定した。

「道徳科の授業」において、心に響く教材を活用し、道徳的価値の内面化を図る指導の工夫を講じるとともに、保護者や地域住民等の支援を得た指導を充実させることにより、児童生徒に自己の生き方についての考えを深め、主体的に判断し、行動しようとする心をはぐくむことができるであろう。

Ⅳ　研究内容

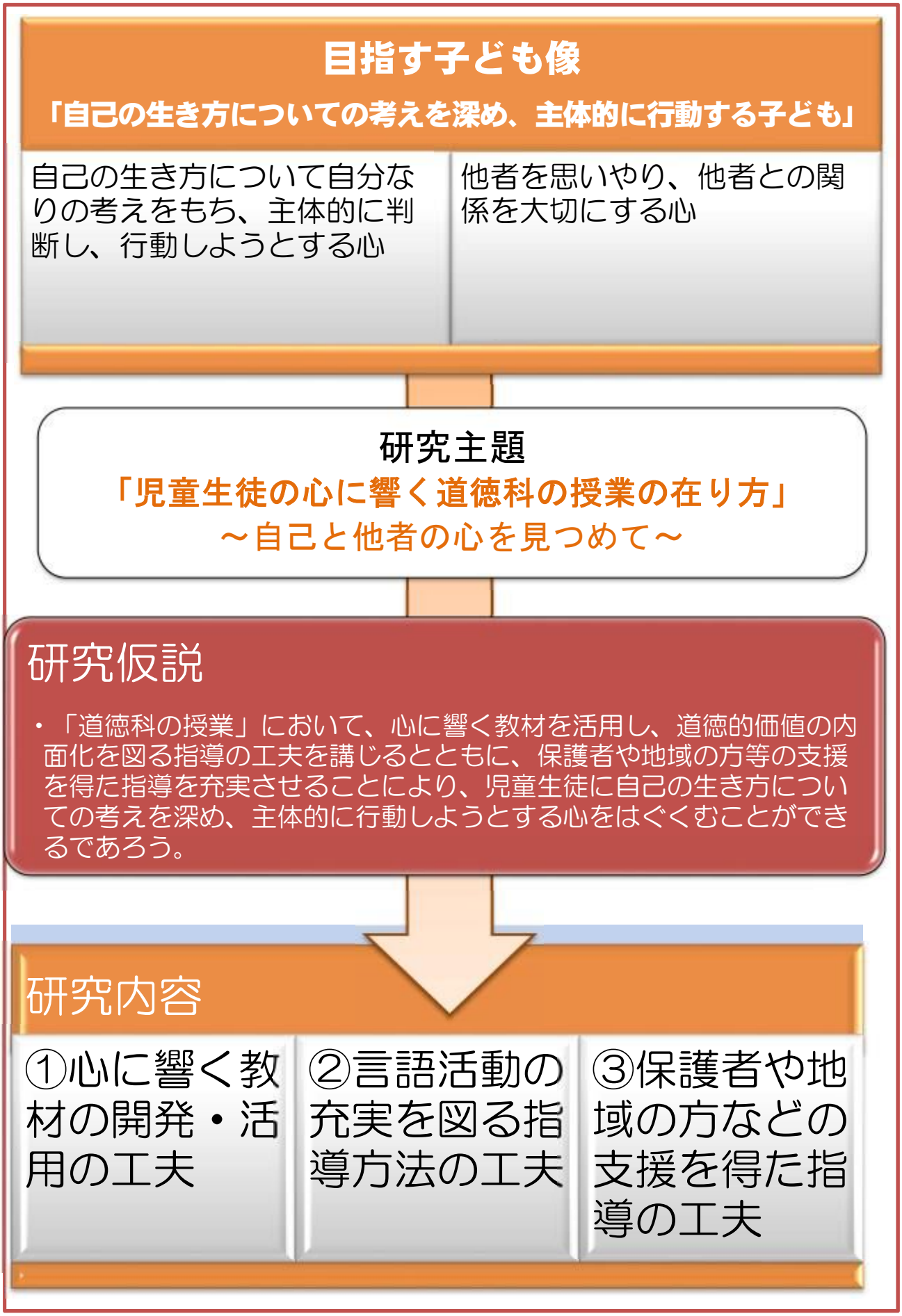
児童生徒に、「児童生徒に自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動しようとする心」をはぐくむためには、道徳教育の要となる道徳科の授業において児童生徒の心が動く指導を展開することが必要である。

そのためには、児童生徒の心に響く教材を開発するとともに、児童生徒・教員・保護者そして地域の方との関わりや体験活動を意図的・計画的に教育活動に位置づけることが大切である。

そこで、研究の対象を「道徳科の授業」とし、研究内容を次のように設定した。

① 心に響く教材の開発・活用の工夫
② 言語活動の充実を図る指導方法の工夫
③ 保護者・地域の方などの支援を得た指導の工夫

Ⅴ　研究の全体構造図


目指す子ども像
「自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動する子ども」
自己の生き方について自分なりの考えをもち、主体的に判断し、行動しようとする心
他者を思いやり、他者との関係を大切にする心
研究主題
「児童生徒の心に響く道徳科の授業の在り方」
～自己と他者の心を見つめて～
研究仮説
・「道徳科の授業」において、心に響く教材を活用し、道徳的価値の内面化を図る指導の工夫を講じるとともに、保護者や地域の方等の支援を得た指導を充実させることにより、児童生徒に自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動しようとする心をはぐくむことができるであろう。
研究内容
①心に響く教材の開発・活用の工夫
②言語活動の充実を図る指導方法の工夫
③保護者や地域の方などの支援を得た指導の工夫

Ⅵ　事業及び研究の進め方

１　事業名

滝川市道徳教育推進事業（平成２７年～２９年）　※３か年研究

２　目的

本市が推進した「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業（平成１９～２０年度）」・「滝川市道徳教育推進事業（平成２１～２２年度、平成 23～２４年度及び平成２５～２６年度）」の成果を「広げる・深める」ことを通して、本市における道徳教育の更なる充実に資することをねらいとする。

（１）各学校における道徳教育の充実
- 「道徳科」の授業実践の充実（アンケートの活用）
- 自己の生き方についての自覚を深める指導の工夫
- 教材の効果的活用（「私たちの道徳」「はーと・ふる1・2」を含む）と言語活動の充実が図られる指導過程の工夫

（２）家庭・地域と連携した道徳教育の推進
- 保護者と連携した「心を耕す」取組の充実
- 地域の教育力を積極的に活用した道徳教育の充実

（３）研究成果の還流・発信
- 実践発表会の実施
- 実践資料データ版の配布（ＤＶＤ収録）
- 教育委員会ＨＰによる保護者や地域に向けた道徳科の授業実践内容の発信

３　滝川市道徳教育研究会議の設置

（１）滝川市道徳教育研究会議の設置

本事業における研究を推進するために、「滝川市道徳教育研究会議」（以下、研究会議）を設置する。

（２）研究会議は、市内小・中学校教員１０名（小学校６名、中学校４名）と事務局（教育委員会職員）により構成される「滝川市道徳教育研究会議」を設置し、研究を推進する。

（３）研究会議の活動

①理論研究
②授業実践を通して研究仮説の検証を図る。
③３年間で１０校の研究授業を実施する。
※平成２７年度：３校、平成２８年度：３校、平成２９年度：４校
④実践発表会を通し、研究成果を還流・発信する。
⑤教材の活用（「私たちの道徳」「はーと・ふる1・2」を含む）が図られる指導資料を作成する。
⑥実践発表会を開催するとともに、「実践資料データ版」を作成し、研究成果を還流・発信する。

４　平成２８年度研究推進の重点

（１）的確な児童生徒の実態把握と教材の開発･活用
- 授業前後アンケート実施、児童生徒による日記、日常の会話や観察等からの実態把握
- ねらいとする道徳的価値の焦点化と内容項目の一体化
- 読み物教材の効果的活用と児童生徒の生活や体験に即した題材となる教材の収集・活用

（２）言語活動の充実を図る指導過程や指導方法の工夫
- 「書く活動」と「話す活動」の有効な位置付けや時間配分と効果的な「話し合いの形態」の在り方

（３）学校、家庭、地域連携の要となる道徳の時間の充実
- 「学級通信」や「私たちの道徳」を活用した双方向の情報･意見交流
- 市内の教員への研究成果の還元

５　児童生徒の変容を把握するための手だて

・計画的な児童生徒の観察　　・各校の自己点検、自己評価 ・感想文、ワークシート　　・児童生徒に対するアンケート ・自校内はもとより、学校間、校種間を超えた教師の話し合い　など

６　本事業における道徳科の授業公開の実施計画

（１）研究会議による公開授業研究

各研究員が研究理論に基づき公開研究授業を行うことで、研究主題の具現化を図る。

（２）コスモスデー地域一斉参観日における道徳科の授業公開

期　日：平成２８年１０月２８日（金）　滝川市地域一斉参観日

市民に向け、市の広報で地域一斉参観日の開催を知らせ、広く授業を公開する。

７　研究推進の経過

【３か年計画２年次】

・第１回研究会議（平成２８年　５月１７日）　研究会議結成、推進計画
・第２回研究会議（平成２８年　６月　９日）　理論研究
・第３回研究会議（平成２８年　８月２５日）　指導案検討（江部乙小）
・第４回研究会議（平成２８年　９月２７日）　授業公開及び協議（江部乙小）
　指導案検討（江部乙中）
・コスモスデー地域一斉参観日　　各校における道徳の時間の授業公開
・第５回研究会議（平成２８年１１月　２日）　授業公開及び協議（江部乙中）
　指導案検討（滝川第三小）
・第６回研究会議（平成２８年１１月２９日）　授業公開及び協議（滝川第三小）
・第７回研究会議（平成２９年　１月２５日）　研究のまとめ
・第８回研究会議（平成２９年　２月２３日）　実践発表会
・「平成２８年度実践報告書」の発刊　　平成２９年　３月末

平成２８年度　滝川市道徳教育研究会議　名簿

＜研究員＞

滝川第一小学校	金子　直樹	東小学校	陰山　保
滝川第二小学校	釣本　浩一	江陵中学校	川原　正和
滝川第三小学校	惣戸　信明	明苑中学校	武田　竜太
西小学校	佐治　理江	開西中学校	今城　紗苗
江部乙小学校	倉本　昌和	江部乙中学校	丸山　治樹

＜事務局＞

滝川市教育委員会　教育部指導参事	小　野　　裕
滝川市教育委員会　教育総務課長	杉　原　慶　紀
滝川市教育委員会　教育総務課長補佐	寺　嶋　　悟
滝川市教育委員会　教育総務課主査	堤　　雅　宏
滝川市教育委員会　教育総務課主事	髙　橋　絢　美

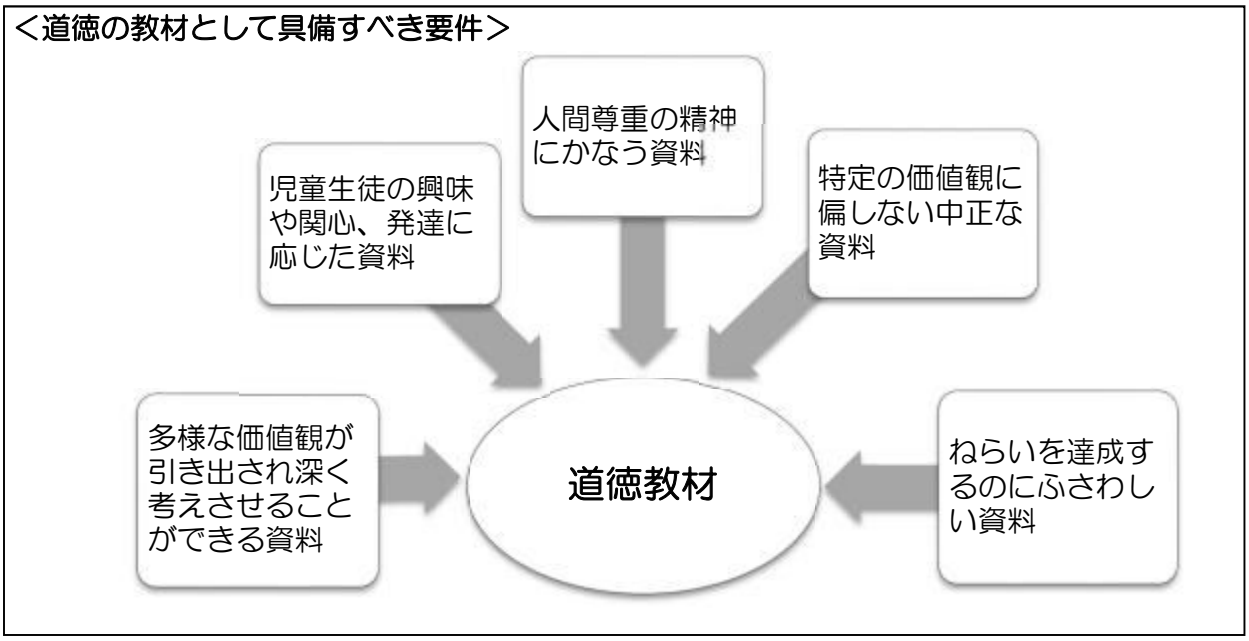
第２章
研究理論

Ⅰ．心に響く教材の開発・活用の工夫

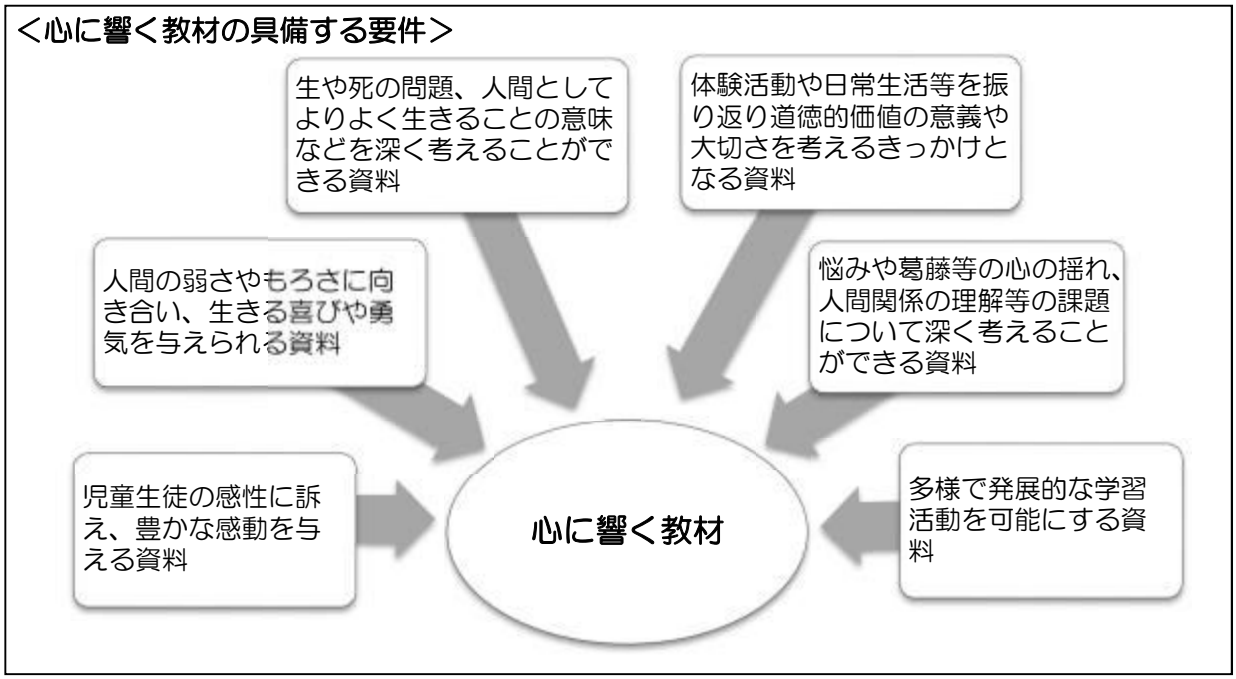
１．心に響く教材

児童生徒に生命を尊重する心や自立した人間として他者とともによりよく生きようとする心をはぐくむためには、ねらいとする道徳的価値や人間としての生き方について、深く考えさせることができるような、「心に響く教材」を開発し効果的に活用することが大切である。

教材は、児童生徒が道徳的価値について内面的な自覚を深めていくための手掛かりとして、大きな意味をもっている。したがって、道徳教材の具備すべき要件として次のような点が挙げられる。これらを参考にして、資料の選定を適切に行い効果的に活用することが必要である。



児童生徒が学習に意欲的に取り組み、充実感をもち、道徳的価値の内面的な自覚を深めることができるようにするために、さらに次のような要件を具備する＜心に響く教材＞を選択するように心がけることが大切である。



２．心に響く教材の開発

児童生徒の心に響き、心を揺さぶり、深い感動を与える教材は、一人一人の心に刻まれ、将来必要なときによみがえるとともに、判断の材料や心の支えとなるなど、生活の中で試されながら児童生徒の価値観として形づくられる。「心に響く教材」を開発するためには、教師の多様な発想を生かし、資料の選択や開発の幅を広げることが大切である。

（１）魅力的な教材の素材を多方面から集める

教材の素材は、本・テレビ・人からの話など、様々な場面で見いだすことができる。道徳副読本に加え、教師自身が心を揺さぶられた素材を幅広く発掘し、教材として開発していくことが大切である。

具体的には、次のような素材群に着目して教材を発掘・開発する。

・伝記、名作、古典、伝説、随想、民話、詩歌、論説、歌、絵本、漫画
・新聞、ニュース等の報道、映画やテレビ番組などの映像、写真
・学校行事などの体験活動や児童生徒の生活でのできごと
・教師自身の体験　　など

（２）読み物教材の表現形式を柔軟に発想する

読み物教材には次のように多様な表現形式がある。ねらいとする価値に迫るためには、教材の特性・児童生徒の実態を踏まえより効果的な形式を選択し活用することが大切である。

・実話をもとにした読み物教材　・絵本、紙芝居（童話や物語）
・意見文や論説形式の教材　　・観察や調査等を伴う教材
・新聞記事　・日記　　・統計を活用した教材など

（３）素材の性格に着目して教材化する

素材がそのまま教材として生かされる場合もあるが、道徳科の授業において教材として活用するためには、必要に応じて加工したり、新たに再構成したりするなどの工夫が必要である。具体的には、次のようなことが挙げられる。

・実話をもとにした読み物を要約し、教材として自作する
・絵本をスキャナーで取り込み、映像化した絵本して教材化する
・教材とする作品（絵・詩・読み物資料の一部など）を画像化する
・補助教材として活用する映像資料を編集する

このように素材を加工する際には、前述の２つの要件に着眼することが大切である。

３．効果的な教材の活用

（１）私たちの道徳・副読本の活用

教材が子どもにとってどう受け止められるかが、道徳科の授業の成否に大きく関わる。教師の視点からの教材の受け止めと、子どもの視点からの教材の受け止めを照らし合わせて、教師が教えたいことと、子どもが考えたいことが重なるようにすることが大切である。そのため、私たちの道徳等の読み物教材を活用する際には、その内容からどのように活用できるかを検討し、子どもの実態に応じて弾力的に活用することが大切である。

教材の活用については、①共感的活用　②批判的活用　③感動的活用　④範例的活用などの類型がある。

共感的活用	子ども一人一人を教材中の登場人物になりきらせて想像させることによって、道徳的価値に基づく心情や判断が主人公に託して語られることで、道徳的価値の自覚を促していく。
批判的活用	教材中の登場人物の行為や考え方、感じ方を子どもに批判、擁護の立場から話し合わせ、道徳的な考え方や感じ方を深めていく。
感動的活用	教材の中で、きわめて感動性の高いものの場合、教材の感動性を最大限に生かし、その感動を重視して道徳的な考え方や感じ方を深めていく。
範例的活用	教材中の登場人物がとった道徳的行為を、子どもに一つの範例として受け取らせ、その行為に含まれる道徳的価値を十分に理解させたり、感じ取らせたりしていく。

～平成２１年度　空知教育局義務教育指導班　学校教育指導資料を参考～

また、本研究では、私たちの道徳等を児童生徒が活用する際に、①私たちの道徳等を子どもたちと一緒に読み進める活用　②私たちの道徳等の中の写真資料をデジタルテレビに投影し、児童生徒の視覚に訴えることで興味関心を高めるような活用　③私たちの道徳等を印刷配布し、分割して話の展開を予想させながら考えさせていく活用等の指導の工夫を講じた。このように、私たちの道徳等の内容や形式、児童生徒の実態に応じ活用・提示の仕方を工夫すると効果的である。

【私たちの道徳・副読本活用の利点と課題】

私たちの道徳等には各学年段階で扱うべき内容項目に即した教材が掲載されており、児童生徒の発達の段階に応じた系統的な指導ができる、自作教材を活用する場合に比べ、教材研究に時間がかからず指導の参考となる先行実践も豊富である、という利点がある。

しかし、全ての教材が子どもの実態に即したものとはならない場合があるため、児童生徒や学級の状況等を考慮し、必要に応じて自作教材の活用を進めていく必要がある。

したがって各学校において私たちの道徳・副読本・自作教材を計画的に位置づけた指導計画を作成することが大切である。

（２）学習指導過程の特質に応じた指導の工夫

児童生徒の道徳的価値の理解を基に、道徳性を養うためには、教材の道徳的価値を自らの生き方と関連づけて、考えさせることが必要である。そのためには、学習指導過程の特質を踏まえた教材の活用、発問などの指導の工夫が大切である。

導　入

＜ねらいとする道徳的価値への方向付けの段階＞

・道徳的価値に意識を向ける。
・主題に対する興味や関心を高める。
・学習に向かう雰囲気をつくる。

【　留　意　点　】

・道徳的価値が自分とかかわりがあるという意識をもたせる。
・考えるための視点をもたせる。

〇導入の工夫

・アンケート調査の結果の提示　・絵画、写真、実物
・音声や音楽　・新聞記事や作文、詩　・地域素材、実験観察　等

・興味、関心を喚起させる発問　・資料に関する発問や説明
・体験を振り返らせる発問　・自分を振り返らせる発問　など

【H28 年度実践例】江部乙中学校
導入で事前にとっていたアンケートをグラフとして表示し、本時のねらいとなる道徳的価値への興味･関心を高める。特に今年度は展開における「書く活動」「話す活動」の活動時間を保障するためにコンパクトな導入を意識した実践が行われた。

展　開

＜中心的な教材によって道徳的価値についての自覚を深める段階＞

・教材の中の登場人物を通して、道徳的価値を追求し、把握する。
・多様な考え方、感じ方に出会う。
・自分の生活、生き方、在り方を振り返る。

【　留　意　点　】

・多様な考え方、感じ方を引き出すための発問を行う。
・登場人物に同化させ、自分の考え方や感じ方を表現できるようにする。
・自分自身を自覚させるようにする。

〇教材提示の工夫

・読み物教材の読み聞かせ
　（スライド等での提示）
・教材の分割提示
・教材の繰り返し提示

〇思考を深める工夫

・自分の考えを書く活動
・ペアでの対話
・小集団での話合い
・座席配置の工夫
・スムーズな思考を促す板書の工夫　など

・教材中の事実や場面、状況を問う発問　・登場人物や場面についての感想、判断、意見などを問う発問
・児童生徒の発言や反応を生かした発問　・思考に揺さぶりをかける発問　・人物の心情に迫る発問　など

【H28 年度実践例】滝川第三小学校
思考する場面や事柄を焦点化するために教材を分割提示し、思考を深める工夫を展開。

【H28 年度実践例】江部乙小学校
めあてとまとめが隣り合っていたり、思考の跡が直線的に表されていたりする構造的な板書。

終　末

＜ねらいとする道徳的価値に対する考えや思いをまとめたり、今後につないだりする段階＞

・道徳的価値を確かめ、整理し、まとめる。

○終末の工夫

・感想の発表　　・教師の説話
・書く活動　　・補助教材の提示　　など

【　留　意　点　】

・望ましい行為への決意表明などは行わないようにする。
・児童一人一人が、自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感でき確かめることができるような工夫が必要である。

・今日の授業についての感想を問う発問　・自己の変容や気付きについて問う発問
・実践への意欲化を図る発問　　など

【H28 年度実践例】　江部乙中学校

終末で「私たちの道徳」を活用し、自分の考えや思いを記入させ、1 時間における自らの心情の変化を振り返らせる活動を行った。

（3）「展開」における教材の魅力を引き出す発問の工夫

展開において、児童生徒の思考に揺さぶりをかけたり、人物の心情に迫らせ、教材に含まれている道徳的価値に迫ったりするためには、教師の発問が重要であり、次の点に留意して発問を構成することが大切である。

① 教材に回答が記述してあることを聞くだけの発問構成をさける。中心発問はねらいとする道徳的価値について考える切り口に関わるものとして設定する。

② 行動の仕方だけを考える発問はさけ、行動の根拠となる心の在り方に関する発問を設定する。

③ 読み物教材において、教材中の副詞や副詞句に留意して発問を構成する。行動は動詞で表現されるが、内面的な心の動きを表現するのは副詞や副詞句である。

例）下線の部分に注目して、ねらいにせまる発問をする

・・・・夕焼けの光の中で、祖母の背中は<u>幾分小さくなった</u>ように見えた。

発問「どうして祖母の背中が『幾分小さくなったように』見えたのですか？」

道徳的価値の自覚を深める「展開」における発問例

1　展開前段～中心教材を通して価値を追求させる段階～	
ア　道徳的心情を問う発問	「～の場面での主人公は、どんな気持ちですか？」
	「～の時、主人公はどう感じましたか？」
	「主人公の心は、どうなりましたか？」
イ　道徳的判断力を問う発問	「主人公は、そのことをどう考えましたか？」
	「主人公は、どんなことがわかりましたか？」
	「主人公は、どちらを選ぼうとしたと思いますか？」
ウ　道徳的態度を問う発問	「主人公は、どんな生活をめざしましたか？」
	「主人公は、どんなことを心がけていますか？」
2　展開後段～価値を主体的に自覚させる段階	
ア　欠けていた面に目を向けさせる発問	「今までの自分の～に対する考え方で足りなかったと思うことはありますか？」
イ　直接経験から学ばせる発問	「～したとき、自分も悩んだり、迷ったりしたことはありませんでしたか？また、そのことを今、どう思いますか？」
ウ　間接経験から学ばせる発問	「～について、今までに人から聞いたり、本で読んだりしたことはありませんでしたか？また、そのことを今、どう思いますか？」
エ　プラスやマイナスの経験を引き出す発問	「～について、今までにできたことや、できなかったことはありませんでしたか？また、そのことを今、どう思いますか？」
オ　主人公と比較して内省させる発問	「主人公と自分を比べて、違ったことや、新しく気が付いたことがありますか？」
カ　先人の行いから学ぶ発問	「～から私たちが学ぶことは、どんなことですか？また、それを生かすには、どんな心がけが大切だと思いますか？」

（４）児童生徒の実態の把握

指導計画の作成にあっては、児童生徒の実態を的確に把握することが必要である。そのためには、日常の児童生徒の観察・記録を継続するとともに、児童生徒の道徳性をアンケート調査等により把握することも大切である。

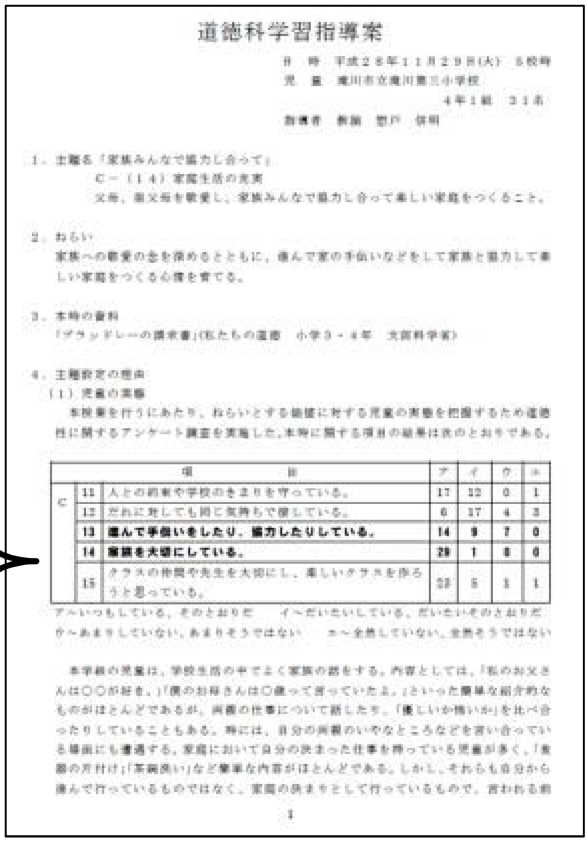
<中学年用>　道徳アンケート

これから、先生がたずねることに答えてください。
これは、みなさんがどんなふうに考えながら生活しているかを知るためのものです。
どの答えを選んでもまちがいはありません。あなたが思ったとおりに安心してこたえてください。
ア・イ・ウ・エの中から、1つきめて○をつけてください。

ア・・・いつもしている、そのとおりだ　イ・・・だいたいしている、だいたいそのとおりだ
ウ・・・あまりしていない、あまりそうではない
エ・・・全然していない、全然そうでない

A	1	正しいと思うことは、勇気をもって実行している。	ア	イ	ウ	エ
	2	まちがったことは、すなおになおしている。	ア	イ	ウ	エ
	3	自分でできることは自分で行い、安全に生活している。	ア	イ	ウ	エ
	4	自分のよいところや直したいところがわかる。	ア	イ	ウ	エ
	5	自分でやろうとしたきめたことは、最後までがんばっている。	ア	イ	ウ	エ
B	6	思いやりの気持ちを考えながら、親切に人と接している	ア	イ	ウ	エ
	7	お世話してくれる人や、お年寄りに、感謝の気持ちをもって接している。	ア	イ	ウ	エ
	8	あいさつをしっかりとして、れいぎ正しく人と接している。	ア	イ	ウ	エ
	9	友達のことをわかろうとして、助け合っている	ア	イ	ウ	エ
	10	自分の考えを相手に伝え、自分の考えとちがう意見も大切にしている。	ア	イ	ウ	エ
C	11	人との約束や学校のきまりを守っている。	ア	イ	ウ	エ
	12	だれに対しても同じ気持ちで接している。	ア	イ	ウ	エ
	13	進んで手伝いをしたり、協力したりしている。	ア	イ	ウ	エ
	14	家族を大切にしている。	ア	イ	ウ	エ
	15	クラスの仲間や先生を大切にし、楽しいクラスを作ろうと思っている。	ア	イ	ウ	エ
	16	滝川や日本の文化と伝統に親しみをもっている。	ア	イ	ウ	エ
	17	外国の文化や人々に興味をもっている。	ア	イ	ウ	エ
D	18	自分の命、他の人の命を大切にしている。	ア	イ	ウ	エ
	19	自然の美しさや不思議さを感じながら、自然や生き物を大切にしている。	ア	イ	ウ	エ
	20	何かに対して「きれいだな」「すばらしいな」と感じることがある。	ア	イ	ウ	エ

自分が、これから特に考えてみたり、高めてみたりしたいことは？
＊1～20の中から、選んで番号を答えてください。または、そう考えたわけを書いてみてください。



道徳科学習指導案

日　時　平成28年11月29日(火)　5校時
児　童　滝川市立滝川第三小学校
4年1組　31名
指導者　教諭　[illegible]

1．主題名「家族みんなで協力し合って」
C－(14) 家庭生活の充実
父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくること。

2．ねらい
家族への敬愛の念を深めるとともに、進んで家の手伝いなどをして家族と協力して楽しい家庭をつくる心情を育てる。

3．本時の資料
「ブラッドレーの請求書」(私たちの道徳　小学3・4年　文部科学省)

4．主題設定の理由
(1) 児童の実態
本授業を行うにあたり、ねらいとする価値に対する児童の実態を把握するため道徳性に関するアンケート調査を実施した。本時に関する項目の結果は次のとおりである。

	項目		ア	イ	ウ	エ
C	11	人との約束や学校のきまりを守っている。	17	12	0	1
	12	だれに対しても同じ気持ちで接している。	6	17	4	3
	13	**進んで手伝いをしたり、協力したりしている。**	**14**	**9**	**7**	**0**
	14	**家族を大切にしている。**	**29**	**1**	**0**	**0**
	15	クラスの仲間や先生を大切にし、楽しいクラスを作ろうと思っている。	23	5	1	1

ア～いつもしている、そのとおりだ　イ～だいたいしている、だいたいそのとおりだ
ウ～あまりしていない、あまりそうではない　エ～全然していない、全然そうではない

本学級の児童は、学校生活の中でよく家族の話をする。内容としては、「私のお父さんは○○が好き。」「僕のお母さんは○歳って言っていたよ。」といった簡単な紹介的なものがほとんどであるが、両親の仕事について話したり、「優しいか怖いか」を比べ合ったりしていることもある。時には、自分の両親のいやなところなどを言い合っている場面にも遭遇する。家庭において自分の決まった仕事を持っている児童が多く、「食器の片付け」「茶碗洗い」など簡単な内容がほとんどである。しかし、それらも自分から進んで行っているものではなく、家庭の決まりとして行っているもので、言われる前

1

【H28 年度実践例】滝川第三小学校

事前アンケートの活用による児童生徒の道徳性にかかわる実態把握を行い、それに基づいた授業の「ねらいとする価値」や「指導する内容項目」を設定した。アンケートは内容項目をもとに児童生徒の発達段階に合わせて作成し、研究授業を行う際に必ず実施することとして取り組んだ。また、今年度は授業の１か月後に同様のアンケートを行い、児童生徒の変容を検証した。

（５）教材提示の工夫

ア．導入段階における教材提示の工夫

導入は、主題に対する児童生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起して、児童生徒一人ひとりの意識をねらいの根底にある道徳的価値の自覚に向けて動機付ける段階である。

したがって、単に生活体験を想起させて発表させるだけではなく、アンケート調査の結果等を提示したり、教材に関する絵画や写真、ＶＴＲ、スライドなどを見せて、視覚的に印象づけたり、音楽ＣＤなどを使って聴覚的に印象づけたりすることも効果的である。また、主題のねらいにかかわる新聞記事、児童生徒の作文、詩や短歌などの活用も大切な視点である。

○教材の画像化

教材をコンピュータに取り込み、画像としてスクリーンに大きく見やすく提示することで、集中力を高め、子どもの興味付けを図る。

イ．読み物教材の分割提示

教材を効果的に活用するためには、児童生徒の意欲付けを図ることが大切である。そこで、必要に応じて読み物教材を学習指導過程に沿って分割提示し、授業に対する期待感を高めたり、話の展開を自分の経験と照らし合わせたりして予想させるなどの工夫を講じると効果的である。

Ⅱ．言語活動の充実を図る指導方法の工夫

１．道徳科における言語活動の充実

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。言葉は、知的活動だけではなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科の授業においてもその言葉を生かした教育についての充実を図ることが大切である。

（１）道徳科の授業における言葉

道徳科の学習では、中心的な教材を活用し、児童の体験や教材に対する感じ方や考え方を交えながら話合いを深めることが学習の中心となることが多い。その意味からも、道徳科の授業における言葉の役割はきわめて大きい。

国語科では言葉にかかわる基本的な能力が培われるが、道徳科の授業では、このような能力を基本に、教材や体験などから感じたことや考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論や討議などにより意見の異なる考え方に接し、協働的に議論したり意見をまとめたりする。

具体的には、

・教材の内容や登場人物の気持ちや行為の動機などを考える。
・友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったり書いたりする。
・学校内外での様々な体験を通して感じ、考えたことを、道徳科の授業において言葉を用いて交流したりする。

このような活動の中で、国語科等で培った言葉の能力が生かされ、一層高められていく。

したがって、道徳科の授業においては、このような言葉の能力を総動員させて学習に取り組ませることが、ねらいを達成する上で重要である。

（２）自分の考えを基に書いたり話し合ったりする（表現する）機会の充実

話し合いは道徳科の授業によく用いられる指導方法であるが、話し合いを深めるためには、児童生徒一人一人に自分の考えをもたせ、効果的に表現させるなどの工夫が必要である。

ア　自分の考えを明確にさせるための書く活動

教材から感じたとった自分の思いや考えを、自己の生活、体験、知的経験等に引き寄せて明らかにするためには、「書く」という活動が大変重要である。

書く活動により、児童生徒が自ら考えを深めたり、あいまいであった考えを整理したりする機会となる。

したがって道徳科の授業においては、自分の考えを明確にさせるための書く活動に必要な時間を十分に確保することが大切である。

また、書く活動により、児童生徒の感じ方や考え方をとらえ、個別指導を進める重要な機会にもなる。更に、1 冊に綴じられた「道徳ノート」などを活用することによって、児童生徒の学習を継続的に深めるとともに、その変容を見取ることが可能となる。

イ　個々の考えを広げ、深めるための話し合い活動の工夫

道徳科の授業において、自分の思いや考えをより多面的にとらえたり、新たな考えに出会い深化させたり、自己の葛藤の中から新たな価値観を見いだしたりしていくためには、話し合い活動が重要な役割を果たす。

話し合い活動を深めるためには、意見を出し合う、まとめる、比較する等の目的に応じて場の設定等を工夫することが大切である。具体的には、

- 児童生徒同士の顔が見えるような座席配置を工夫する。
- グループやペアによる話し合いを取り入れる。（話す機会が増え、多くの発言を引き出すことができる）
- 同じ考えをもつ子ども同士が集まるように座席の移動を行い、一人一人の立場を明確にして話し合う。

などの工夫が考えられる。

道徳科の授業における話し合い活動は、友達との話し合いにより自分なりの思いや考えが深まり、道徳的価値の自覚につなげていくことが大切である。そのためには、学級の中に全ての意見を受け入れる温かい風土が確立されていることが前提となる。

２．道徳科の授業における「書く活動」「話す活動」の役割とねらい

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。言葉は、知的活動だけではなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科の授業においてもその言葉を生かした教育についての充実を図ることが大切である。

（1）「書く活動」の役割とねらい

書くことは、教材との出会いで生じた自身の思いや考えを深めたり、整理したりすることにつながる。また、書く際には、論理的な思考力や適切な判断力が求められ、それらの能力の育成にもつながる。そして、書くという自己を表現する活動によって、自分の考えや立場を明確にすることもできる。そして、書いた内容は周囲の人たちと共有し、共通のものとすることもできる。

本研究では、これらを「書く活動」の役割・ねらいとおさえる。

（2）「話す活動」の役割とねらい

話すことには、情報伝達の役割がある。また、他者に対して、自己についての理解をうながすねらいもある。そして、伝達や交流によってよりよい考えを生みだすという意味合いもある。

本研究では、これらを「話す活動」の役割・ねらいとおさえる。

◆「書く活動」の役割とねらい
①自らの考えを深めたり、整理したりする。
②論理的な思考力や適切な判断力を育成する。
③自分の考えや立場を明確にする。
④周囲の人たちと共有し、共通のものとする。

◆「話す活動」の役割・ねらい
①情報伝達のねらいがある。
②他者に対して、自己について理解をうながす。
③伝達や交流によってよりよい考えを生みだす。

「書く活動」と「話す活動」は、いずれも主として言語による表現活動である。前者は文字言語によって、後者は音声言語によって行われる。

学級で話し合うとき、事前に自分の考えなどを一人ひとりに書かせる。このことは、自分の考えを持つ機会になると同時に、「話す活動」に参加するための前提となる。

また、子どもたちは互いに話すことによって、違った考えや見方を知ることができ、新たな知識を習得することができる。この活動を通し、初めに考えたことが、その後に修正される可能性が生じてくる。

話したあとに改めて「書く活動」を組み入れることにより、これまでの学習を振り返り、自分の考えの変容を自覚することができ、自己評価をする機会になる。

３．「書く活動」「話す活動」を生かした指導過程の工夫

「書く活動」と「話す活動」が道徳科の授業の中で意図的・計画的に仕組まれ、それぞれの活動を充実させることにより、道徳科のねらいである、道徳的価値の自覚と自己の生き方についての考えを深めることにつながると考える。このような指導過程を基本とし、道徳科の授業を行うことによって、目指す子ども像「自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動する子ども」に迫っていきたいと考える。

【H28 年度実践例】　江部乙小学校
前後４人の小グループでの「話す活動」を通して、自分が考えたことを交流し、他者の視点に触れ、意見を受け止め合う。

【H28 年度実践例】　江部乙中学校
主人公の内面について「書く活動」を通して深めた自分の考えをもとに「話す活動」を行い、新たな考えに触れ合う。

【H28 年度実践例】　滝川第三小学校
「書く活動」により自分が予想したことについて、そう考えた根拠を挙げながら「話す活動」を行い、教材の主人公の言動を自分ごととして伝え合う。

Ⅲ．保護者や地域の方などの支援を得た指導の工夫

児童生徒に自他の生命を大切にするなど豊かな心をはぐくむためには、様々な人たちとのかかわり合いの中で、多様な生き方・考え方を学ばせることが必要である。

そのためには、道徳科の授業において保護者や地域の方などを外部講師として招き、生き方や生命に関する貴重な経験など、主題や中心教材にかかわって話をしてもらう、質問を受けてもらうなどの指導の工夫が求められる。

１．学習指導過程への位置付け

保護者や地域の方などの支援による指導を充実させるためには、次の視点で学習指導過程を工夫することが大切である。

導入

・導入において保護者や地域の方にお願いする話の内容などについては、主題について児童生徒が興味や関心をもったり、課題意識を高めるよう配慮することが大切である。

展開

・保護者や地域の方の語りや説話を、展開における中心教材として位置づける場合は、児童生徒たちの話し合いが深まるよう、保護者や地域の方などから問いかけを入れていただくことが効果的である。

・保護者や地域の方の講話などを、補助的な教材として位置づける場合は、主題にかかわる事柄を補足したり意味付けをすることもできる。話し合いを深めるためには、保護者や地域の方が直接、児童生徒たちの討議に参加することも考えられる。

終末

・児童生徒に寄せる保護者や地域の方の愛情は、児童生徒の心に響き感動的な話としていつもまでも心に残る。終末における保護者や地域の方の説話などを、１時間のまとめとして活用したり、今後の発展につなげることが大切である。

２．保護者や地域の方を迎えるための配慮事項

保護者や地域の方の支援を得るにあたって次のことに配慮することが必要である。

道徳授業の特質

・保護者や地域の方を招いた授業を授業改善の一つととらえ、道徳科の特質を押さえ、有意義なものとなるように工夫する。

事前打ち合わせ

・保護者や地域の方から協力をいただく目的、授業のねらいと参加していただく形態などについて、事前に打ち合わせをしておくことが大切である。

あいさつやお礼

・保護者や地域の方に対する接し方やあいさつ、授業後のお礼の手紙など、児童生徒に対するきめ細やかな指導が必要である。

【H28 年度実践例】　江部乙中学校

子どもたちが小学生の頃から見守り活動を続けられてきた地域の方をゲストティーチャーに招き、終末で本時の道徳的価値に関わるお話を、子どもたちの成長への喜びを込めて語っていただくことで今後の自分のあり方を考えさせる。

3．道徳授業の発信と双方向の取組

児童生徒の豊かな心をはぐくむことは、1時間の授業のみで完結することはあり得ない。また、学校における指導のみで十分ではないことも言うまでもない。学校と家庭が同じ方向を向き、子どもの豊かな心を育てる思いを共有しながら道徳教育を推進することによって、初めて成果が表れるものと考える。

そのためには、学校で行っている道徳授業に関わる積極的な情報の発信と、教師と保護者双方向の取組の推進が求められる。

【H28 年度実践例】　江部乙小学校

学級通信を使って授業の内容を家庭に発信。子どもたちが授業で記入したワークシートを家庭で読んでいただき、それに関する保護者の思いを同じワークシートに書いてもらう。ワークシートは再度提出してもらい、保護者のコメントを通信に掲載。保護者同士で思いや家庭で子どもと話をしたことを共有する。

第３章
平成 28 年度
授業実践

道徳科学習指導案

日　時　平成２８年９月２７日(火)５校時
児　童　滝川市立江部乙小学校
４年１組　１２名
指導者　教諭　倉本 昌和
（支援学級担任　槙　真弓）

１．主題名「仲間と助け合って」
B－（９）
友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

２．ねらい
友達の身になって考え、互いに理解し合い、友達を大切にしようとする態度を育てる。

３．本時の教材
「同じ仲間だから」（私たちの道徳　小学３・４年　　文部科学省　）

４．主題設定の理由
（１）児童の実態
本授業を行うにあたり、ねらいとする価値に対する児童の実態を把握するため道徳性に関するアンケート調査を実施した。本時に関連する項目の結果は次のとおりである。

		項　　目	ア	イ	ウ	エ
B	6	思いやりの気持ちを考えながら、親切に人と接している	7	4	0	0
	7	お世話してくれる人や、お年寄りに、感謝の気持ちをもって接している。	9	2	0	0
	8	あいさつをしっかりとして、れいぎ正しく人と接している。	6	5	0	0
	9	**友達のことをわかろうとして、助け合っている**	**9**	**2**	**0**	**0**
	10	**自分の考えを相手に伝え、自分の考えとちがう意見も大切にしている。**	**5**	**5**	**1**	**0**
C	12	だれに対しても同じ気持ちで接している。	8	3	0	0
	15	クラスの仲間や先生を大切にし、楽しいクラスを作ろうと思っている。	10	1	0	0

ア～いつもしている、そのとおりだ　　イ～だいたいしている、だいたいそのとおりだ
ウ～あまりしていない、あまりそうではない　　エ～全然していない、全然そうではない

本学級は、本校の中でも一番人数が少ないクラスである。子どもたちは小さい頃から、同一集団の顔なじみであり、お互いの気心は知れている。明るく活動的な児童が多く、休み時間等は、男女一緒になって多くの人数で体育館やグラウンドで活発に遊んでいる。

基礎的な生活習慣は、おおむね確立されており、きまりや学習ルールもしっかり守っていこうとする雰囲気が学級に定着してきている。また、守れていない場合でもお互いに声を掛け合って、直していこうと努力することができる。アンケートの結果から見ても、アやイに回答している子が多く、クラスの状況を反映しているものといえる。

ただ、互いの生活の中では、小さなトラブルや、ルール違反が起こることがある。独りよがりのわがままであったり、強く注意しすぎてしまったり、ということが原因となっていることもある。本時ではそうした実態を踏まえて、仲間同士で互いに理解し合い、助け合うことについて考えを深め、より良い仲間関係を築こうとする心情を育てたい。

（２）教材分析及び教材観

運動会の学級対抗種目の練習期間。運動が苦手でいつもチームの足を引っ張る光夫が指にけがをした。それを見て、練習を休んだほうがいいと主張する同グループの子の発言に、主人公のとも子は返事に困るが、転校した同級生の手紙の言葉を思い出して「仲間を外して勝とうとするのは間違いだ。」とはっきり主張する。これをきっかけに、３人が心を一つにして練習に励むという内容である。

物語の前半では、とも子の葛藤場面までを読み、クラス児童の心情を想像して、揺れ動くとも子の気持ちを自分ごととして捉えながら思考させ、話し合わせる。後半は、転校した友達の手紙を思い出し、良心に従って行動しようとするとも子の言葉を考えさせながら、とも子の心情がどのように変化したのかに着目し、仲間を大切にすることの素晴らしさや美しさに気づかせていきたい。

５．目指す児童の変容

【授業前】	【授業後】
・自分の意に沿わないことがあると不機嫌になったり、自分の思い通りにしようとしたりする。 ・相手の気持ちを考えず軽はずみな言動をしてしまうことがある。	・相手の心情を思いやり、我慢したり、相手に譲ったりすることができる。 ・仲間の良さを認め、思いやりのある行動ができる。

６．指導の工夫

（１）教材提示の工夫

教材を３場面に分割して提示する。そうすることで、それぞれの場面に思考を焦点化させて、とも子さんの心の揺れや葛藤を想像することができると考え

る。また、思考の跡をたどったり、思考を先に進めたりできるように挿絵や吹き出しを効果的に活用した機能的な板書を構成する。

（2）ワークシートの工夫

本授業を通して子どもたちが思考し、これからの生活につなげていこうと考えたことを保護者の方にも見ていただき、さらに感想やメッセージを寄せていただけるような形式のワークシートを使用する。家庭と一体となって、子どもたちの心の育ちを多面的に捉え、支えていけるような工夫をする。

7．本時の展開

段階	主な学習活動	形態	・留意点　◆評価
導入（3分）	○学習課題の提示 今日は皆さんと、「仲間」についていろいろ話し合っていきたいと思います。 ○教材と登場人物を紹介する。	全体	・友達についてイメージさせる。 ・イラストを提示し、3人の人物を確認する。
展開前半（15分）	○教材の前段部分を読む。 ○物語の背景と光夫の人物像を確認する。 どんな行事が近づいていますか。 ・運動会 運動会に向けてクラスのみんなはどんな気持ちになっていますか。 ・競技に勝ちたい。 ・他のクラスに負けたくない。 光夫さんはどんな男の子ですか。 ・何をするのも遅い。 ・運動が特別苦手。 ○ひろしが不満を言った時のとも子の気持ちを考える。 「そうねえ。」と言った後にもしも何かを言ったとしたら、とも子さんはどんなことを口にしたと思いますか。 ・やっぱり光夫さんがいると勝てないのかな。 ・光夫さんも頑張っているのにな。 ・そんなことを言うのはひどいよ。	全体 全体 全体	・P76L1～L16を範読する。 ・クラスのみんなの思いを想像させながら、とも子の立場になって考えさせる。

展開前半（15分）	○教材の中段を読む。	全体	・P76L17～P77を範読する。
	○休んだほうが良いといわれた光夫に対するとも子の気持ちを考える。	全体	・イラスト提示
	ひろしさんが休んだほうがいいんじゃないと言った時、とも子さんの心にどんな考えがわいてきて「はっ」としたのだろう。		
	・そのくらいのけがで休ませるのはよくない。 ・光夫さんが休めば勝てるかもしれない。		
	○このときのとも子さんの心情を自分ごととして考える。	個人	【書く活動】 ・ワークシートに記入 ・とも子の立場になって考えさせる。
	みなさんなら、このときどのように考えるでしょうか。	全体	【話す活動】
	・指に気を付けて頑張ろうという。 ・無理しないほうがいいよという。 ・無理に休ませることはないという。		
展開後半（20分）	○教材の後段を読む。	全体	・P78L1～L11を範読する。
	○よし子さんからの手紙を思い出してはっとした、とも子の気持ちを考える。	個人	【書く活動】 ・ワークシートに記入
	転校したよし子さんからの手紙を思い出し、「はっ」としたとも子さんは、この後ひろしさんたちに何と言ったでしょうか。	グループ	【話す活動】 グループ→全体 ・数名を指名する。
	・運動が苦手だからといって仲間はずれにするなんてひどい。 ・そんなことをしたら光夫さんはつらい気持ちになる。 ・光夫さんも一緒に練習しよう。	全体	◆このときのとも子さんの発言を考え、そう考えた理由を自分なりの言葉で、伝えようとしている。 ・P78L12～P79を範読する。
	○仲間を大切にするために必要なことを考え、伝え合う。	個人	【書く活動】 ・ワークシートに記入
	仲間を大切にするために必要なことを考えてみましょう。	全体	・全員に発言させる。
	・仲間はずれにしない。 ・自分勝手なことをしない。 ・優しくしてあげる。		

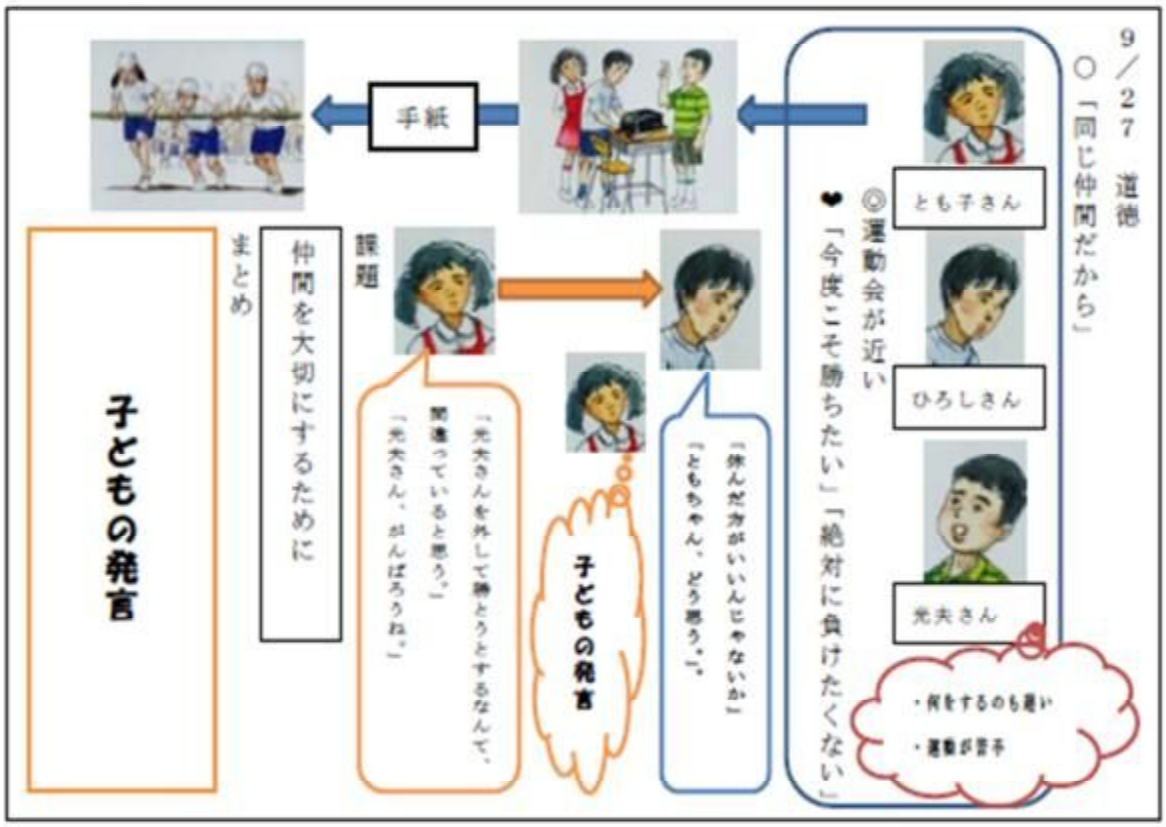
終末（5分）	○教師からの語りかけ ・お互いのことを認め合い、力を合わせることの素晴らしさについて教師自身の体験やエピソードを紹介し、子どもたちの心に余韻を残す。 ○ワークシートを回収する。	全体	・自己開示を意識する。

8．評価

（1）教材提示の方法や板書は児童の思考を働かせる上で効果的であったか。

（2）本時の学習形態や指導過程は、ねらいに迫る上で適切であったか。

9．板書計画



《引用参考文献》

・「私たちの道徳　小学校　活用のための指導資料」　　文部科学省

【本時の中心教材】

・「同じ仲間だから」（「わたしたちの道徳　小学校３・４年」　文部科学省）

【補助教材】

・ワークシート

九月二十七日(火)

四年生道徳「同じ仲間だから」

名前（　　）

一、あなたがとも子さんだったら、どんなことを考えますか。

二、はっとしたとも子さんは、この後、ひろしさんたちに何と言ったでしょうか。

三、仲間にを大切にするために必要なこと

★おうちの人からのメッセージ

※子どもたちの考えたことにメッセージを寄せてください！

道徳科学習指導案

日　時　平成２８年１１月２９日(火)　５校時
児　童　滝川市立滝川第三小学校
４年１組　３１名
指導者　教諭　惣戸　信明

１．主題名「家族みんなで協力し合って」
Ｃ－（１４）家庭生活の充実
父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくること。

２．ねらい
家族への敬愛の念を深めるとともに、進んで家の手伝いなどをして家族と協力して楽しい家庭をつくる心情を育てる。

３．本時の教材
「ブラッドレーの請求書」(私たちの道徳　小学３・４年　文部科学省)

４．主題設定の理由
（１）児童の実態
本授業を行うにあたり、ねらいとする価値に対する児童の実態を把握するため道徳性に関するアンケート調査を実施した。本時に関する項目の結果は次のとおりである。

項目			ア	イ	ウ	エ
C	11	人との約束や学校のきまりを守っている。	17	12	0	1
	12	だれに対しても同じ気持ちで接している。	6	17	4	3
	13	**進んで手伝いをしたり、協力したりしている。**	**14**	**9**	**7**	**0**
	14	**家族を大切にしている。**	**29**	**1**	**0**	**0**
	15	クラスの仲間や先生を大切にし、楽しいクラスを作ろうと思っている。	23	5	1	1

ア～いつもしている、そのとおりだ　　イ～だいたいしている、だいたいそのとおりだ
ウ～あまりしていない、あまりそうではない　　エ～全然していない、全然そうではない

本学級の児童は、学校生活の中でよく家族の話をする。内容としては、「私のお父さんは○○が好き。」「僕のお母さんは○歳って言っていたよ。」といった簡単な紹介的なものがほとんどであるが、両親の仕事について話したり、「優しいか怖いか」を比べ合ったりしていることもある。時には、自分の両親のいやなところなどを言い合っている場面にも遭遇する。家庭において自分の決まった仕事を持っている児童が多く、「食器の片付け」「茶碗洗い」など簡単な内容がほとんどである。しかし、それらも自分から進んで行っているものではなく、家庭の決まりとして行っているもので、言われる前

にやるよりも言われてからしぶしぶ実行するという児童が多かった。

家庭訪問などでは、保護者から「だんだん言うことを聞かなくなってきた」という声を聞くようになり、「学校の話をあまりしなくなった」という話も多い。アンケートでは、家族を大切にしているという回答が圧倒的に多くなっているが、手伝いなどを協力的に行っているか、人(家族)との約束を守れているかについては、実情としてそれほど行動に表れていないことが見てとれる。

中学年という時期は、自身の世界が広がることで家族の存在より友達の存在が大きくなり、家族に対する敬愛の念が薄まっていきがちである。そこで、本時では親の大きな愛情に気づかせ、自分自身も家族の一員として家族の役割を担うことで、家族が協力し合うことの大切さを感じさせたい。

（2）教材分析及び教材観

主人公ブラッドレーは、家での手伝いや習い事の見返りに報酬を得ようと考え、母親に対して「請求書」を出す。母親はその請求書の通りの金額をブラッドレーに払った。そこには母親からの請求書も一緒に添えられていた。その請求書には、すべてが「０ドル」と書かれていた。それを見たブラッドレーの母親に対する思いの変容が描かれている。

本時では、教材を４つに分けて提示する。前半２場面で普段の自分を振り返らせながら、ブラッドレーの道徳的価値をとらえさせる。そして、残りの２場面では母親の無償の愛情に気づいてゆくブラッドレーの道徳的価値の変容とその理由について考えさせる。そして、自分が行っている手伝いなどの中に母親の愛情と同じものがないか考えさせ、家族に対する思いと自分のしている「お手伝い」の意味をとらえ直す機会としたい。

５．目指す児童の変容

【授業前】		【授業後】
・お手伝いは、やることになっているから仕方なくやっている。 ・家族のことは好きだけど、なんとなくそう思っているだけである。	⇨	・お手伝いをすると家族の役に立つし、喜んでくれるので、やりがいがある。 ・家族が大好きだから自然と協力するし、喜ばせたいと思う。

６．指導の工夫

（1）教材提示の工夫

教材を４場面に分けて提示する。そうすることにより、それぞれの場面に思考を焦点化させて、母親の思いやそれに気づいたブラッドレーの心の変容を想像することができると考える。また、思考の跡をたどったり、思考を先に進めたりできるように、挿絵や吹き出しを効果的に活用した板書を構成する。

（2）自己評価とそれを生かす手立て

授業導入と終末で２度の自己評価を行う。初めの自己評価では、これまでの手伝いの内容と行っている理由を振り返り、自分の手伝いに対する認識をありのままにとらえさせる。２度目の自己評価では、教材から学んだ価値と重ねてこれから自分がどのような思いをもってお手伝いに取り組んでいくべきかを考えさせたい。

7．本時の展開

段階	主な学習活動	形態	・留意点　◆評価
導入（5分）	○お手伝いの経験について振り返る。 今までどんなお手伝いをしたことがありますか。 ・食器の片付け　・茶碗洗い　・おつかい ・風呂掃除　・ゴミ出し　・ペットの散歩 そのお手伝いをしたのはなぜですか。 ・やれと言われたから　・楽しそうだったから ・お小遣いをくれたから	全体	■自己評価① ・自分がしているお手伝いやなぜそれをやっているかについて考えさせ、資料についての興味付けをする。
展開前半（15分）	○教材前半１を読み、ブラッドレーの気持ちを考える。 ブラッドレーはどんな気持ちで請求書を書いたのでしょう。 ・もっとお小遣いがほしいな。 ・きっとうまくいくぞ。 ・がんばったからお金をもらえて当然だ。 ・お母さんにがんばったことを気づいてほしい。 ○教材前半２を読み、ブラッドレーの気持ちを考える。 お金をもらったブラッドレーは、どんな気持ちになりましたか。 ・やったぜ。　・うまくいったぞ。 ・お手伝いしたんだから当然さ。 ・何を買おうかな。　・また請求書書こうかな。 ・次はもっと高くしよう。 ○教材後半１を読み、ブラッドレーの気持ちを考える。 お金といっしょに１枚の小さな請求書がありました。お母さんの請求書の金額がいくらか予想してみましょう。 ・かん病代とかすごく高い気がする。 ・食事代とか１０ドル以上じゃない ・４ドルなんかじゃすまないよ。 ・お母さん怒ったのかな。 ・お金返そうかな。	全体	・教材を範読する。 ・ブラッドレーの請求書を提示する。 ・教材を範読する。 ・ブラッドレーの気持ちを共感的にとらえさせる。 ・教材を範読する。 ・金額を隠して、お母さんの請求書を提示する。 ・ブラッドレーの気持ちも考えさせる。 （お母さんからの請求書や予想した金額から）

展開後半（15分）	○教材後半２を読み、話し合う。 目に涙をいっぱいにしたブラッドレーは、この後、お母さんに一言伝えます。何と言ったのでしょうか。 ・お母さん、ごめんなさい。 ・お母さんにたくさんのことをしてもらっていたことに気づいていなかった。 ・お母さんにひどいことをしてしまった。 ・自分のことしか考えてなかった。 ・お駄賃なんてなくても、お手伝いをするぞ。 ・お金は返します。	全体 個人 グループ 全体	・教材を範読する。 ・お母さんの請求書の金額を提示する。 【書く活動】 ・ワークシートに記入 ・考えた理由も書く。 【話す活動】 グループ→全体 ・数名を指名する ◆お母さんの請求書の意味をとらえ、ブラッドレーの思いを想像することができたか。 【ワークシート・発言】
終末（10分）	○自分のお手伝いについて振り返る。 自分がこれからお手伝いをするときに、心がけようと思ったことはありますか。 ・茶碗洗いを楽しんでやろうと思ったよ。 ・家族に喜んでもらえるようにできたらいいな。 ・「ありがとう」って言ってもらえるようにがんばってみようかな。	全体	■自己評価② ・導入で想起した自分のお手伝いについて改めて振り返り、これからのお手伝いに対する姿勢と意味について考えさせる。

8．評価

（1）教材提示の方法や板書は、児童の思考を働かせる上で効果的であったか。

（2）本時の学習形態や指導過程は、ねらいに迫る上で適切であったか。

9．板書計画

《引用参考文献》

・「私たちの道徳　小学校　活用のための指導資料」　　文部科学省

【本時の中心教材】

・「ブラッドレーのせい求書」(「私たちの道徳　小学校３・４年」　文部科学省)

道徳科学習指導案

日 時 ： 平成２８年１１月　２日(水)５校時
生 徒 ： 滝川市立江部乙中学校
２年 A組 ２４名
指導者 ： 教諭 丸山 治樹

1．主題名「家族の一員としての自覚を」
C－（１４）　家族愛、家庭生活の充実
父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。

2．ねらい
かけがえのない家族の存在に気付き、その一員として関わり合いながら、充実した家庭生活を築こうとする態度を育てる。

3．本時の教材
①生徒への事前アンケート
②「一冊のノート」（「私たちの道徳 中学校」 文部科学省）

4．主題設定の理由
（1）生徒の実態
本授業を行うにあたり、ねらいとする価値に対する生徒の実態を把握するため、道徳性に関するアンケート調査を実施した。本時に関連する項目の結果は次のとおりである。

項目			ア	イ	ウ	エ
C	１０	学校や社会のルールを守り、自分のすべきことを果たしている。	18	4	1	1
	１１	誰に対しても公平に接している。	7	13	2	1
	１２	**世の中や人のためになることを進んでしている。**	9	12	**2**	**1**
	１３	クラスやクラブ活動などで、自分の役割を知り、責任を果たしている。	15	7	2	0
	１４	**家族の一員として、家族の役に立つことをしている。**	10	11	**2**	**1**

ア～いつもしている、そのとおりだ　　イ～だいたいしている、だいたいそのとおりだ
ウ～あまりしていない、あまりそうではない　　エ～全然していない、全然そうではない

今年の４月に本校に赴任し、この学級の担任となり、半年が過ぎようとしている。ここ江部乙町は小学校１校と中学校１校であり、普通学級は学年１学級という構成であり、級友の性格や行動は熟知し、思ったことは歯に衣を着せず発する仲で、学級のまとまりも強い。古くから農業が基幹産業であり、住み馴染んでいる地域住民が多いことから生徒たちの健全な成長を願う気持ちも強く、教育にも熱心な地域である。また、生徒たちも地域住民の期待に応えようと努める姿が見られる。

生徒たちは、１年生の時の学級指導がしっかり行われていたおかげで、２年生スタート時には学級役員や各係に積極的に参加し、責任ある活動を行えていた。しかし、日が経つにつれ授業道具の不備や各種調査物の提出などルーズな面が見受けられるようになり、学校行事の役割分担では自己中心的な発言をし、集団生活を乱す生徒も少数ではあるが見られるようになってきた。

事前にとった道徳性に関するアンケート調査では、約80パーセントの生徒が家族の一員として、役に立つことをしていると答えているが、学習や生活について家族が口をはさみ、煩わしいなどといった家族批判をしているのを時々耳にすることがある。

そうした実態は思春期を迎えた生徒特有のものではあるが、本時においては、身近にいる家族の存在に改めて目を向けさせることから、いかに自分にとってかけがえのないものであるかを見つめさせていくこととする。義務教育修了まで残り１年ほどとなった今、家族への思いを深め、その一員として支え合い、助け合っていこうとする態度を育みたい。

（２）教材分析及び教材観

①家族に対するアンケート調査

○家族形態・・・・・・・・・・・・・・・核家族１６名・直系家族８名

○家族とのコミュニケーション・・・・・多い　２３名・少ない　１名・全然ない　０名

○家族に対する気持ち・・・・・・・・・大切にしている　　２１名

大切にしていない　　０名

別に考えていない　　３名

○上記の理由として

大切にしている理由　　：そうすることが当たり前だから

なくては困る存在だから

大切にされているから

育ててくれた人たちだから

別に考えていない理由　：特に考えたことがないから

３分の２の生徒が核家族であり、コミュニケーションも多いと回答した生徒が多い。家族を大切にする気持ちをほとんどの生徒が抱いているようだが、その理由は安直な答えに終始している傾向がある。

②「一冊のノート」

主人公「僕」は、物忘れが多くなった、同居している祖母と様々なことに対してトラブルになる。祖母に不満を感じる「僕」であったが、ある日、一冊のノートを見つけて中を見ると、そこには祖母の苦悩と家族への思いが綴られていた。いたたまれない気持ちになる「僕」であったが、このことを通して家族への思いを深めていくことになる。

中学生という時期は、自我意識が強くなり、自分の判断や意思で生きていきたいという自立心が高まってくる。そのため、父母や祖父母の言動に反抗的になるという側面も見られる。しかし一方では、家族の一員として、家庭の仕事の大変さや家族の有り難さがわかってくる時期でもあ

る。本教材の活用にあたっては、主人公「僕」の気持ちをたどりながら、家族との関わりを振り返らせ、家族がお互いに深い絆で結ばれていることを生徒に深く考えさせたい。

前半では、薬局の前で祖母に出会ったときに知らん顔をした「僕」の心情を想像させながら、父から病院の話を聞いたときに黙ってしまった「僕」の思いを考えさせたい。後半では、祖母の書いた一冊のノートを読んだ主人公が、黙って祖母と並んで草取りをした際の気持ちに目を向けさせ、「僕」の家族に対する気持ちにどのような変容が生まれたのか、また家族の一員であるとはどのようなことなのかについて考えさせたい。

5．目指す生徒の変容

【授業前】		【授業後】
・平々凡々と毎日の家族生活を送り、本人のためにとする家族のアドバイスを耳障りなものと感じている生徒が多く存在している。	⇨	・家族とはかけがえない大切なものであることに気づき、互いに尊重し合うことによって大きく成長できる場であることを自覚する。

6．指導の工夫

（1） 「書く活動」「話す活動」の重点化

自己を見つめ、思考し、多くの生徒に考えを表出させる学習を展開するために、「書く活動」「話す活動」の重点化を図る。「書く活動」と「話す活動」を展開後半の主人公「僕」の変容に焦点化して行い、自らの考えをしっかりと整理させたうえで、友達の多様な意見にたくさん触れさせる。

特に、全ての生徒が自分の言葉でしっかりと考えを伝え合う場を確保するために、全体での「話す活動」の前には、小集団での「話す活動」を位置づけることにする。

（2） ゲストティーチャーの活用

授業を通して考えたことをさらに自分のこととして、日常生活につなげるために、終末段階でゲストティーチャーを活用する。小学校の頃より生徒たちを温かく見守ってくださっている地域の方を実際にお招きし、生徒たちの成長している姿を見て思うことなどを話していただくことにする。

ゲストティーチャーはいち地域住民ではあるが、地域で生徒たちと共に生活をする者として、また、生徒と同じ年齢ぐらいの孫を持つ者として、その思いをじかに生徒たちの前でお話ししていただくことにより、自分たちが如何に周りから大切な存在として思われているのかということを認識するとともに、最も身近にいる家族の思いにも目を向けていくことができると考える。

ゲストティーチャー

江部乙地区青少年育成会副会長、その他役職多数。昨年度まで、江部乙小学校の学校関係者評価委員を務めるとともに、登下校時の安全見守りなど子どもたちの成長を間近にご覧になられてきた。生徒にとっては小学校６年間、様々な場面でお会いしたことがある関係であり、教材中の祖母と年齢も近く、家族を含めた身近な人々の思いを子どもたちに伝えていただくこととした。

7．本時の展開

段階	主な学習活動	形態	・留意点 ◆評価
導入 5分	○アンケート調査の結果を紹介し、友達が普段感じている家族への思いを共有することから、自分自身の気持ちを振り返るとともに 「家族」について考えることを確認する。 ○課題の提示 ○「一冊のノート」の中心人物を確認する。	全体	・アンケート結果を大型テレビに提示。 ・自由記載について数名分を紹介する。
展開 前半15分	○「一冊のノート」を範読する。 ○主人公の心情を考える。 僕が困っていることは何だろう。 ・祖母との人間関係について。 もし、祖母が僕に話しかけてきたら、僕はどのような行動をとったのだろうか。 ・聞こえないふりをする。 ・無視をする。 なぜそうすると思ったのですか。 ・自分の家族だと思われたくない。 ・変な格好をしている祖母が恥ずかしい。 ・馬鹿にされるのが怖かった。 ○「一冊のノート」を範読する。 ○主人公の心情を考える。 父からの話を聞いたときに、それ以上何も言えなくなってしまったのは、「僕」の心の中にどんな気持ちが湧いたからだろう。 ・現在の医学の力では治せない病気なのだから、これ以上言っても仕方がない。 ・小さな頃から祖母にいろいろなお世話をしてもらっていたことを思い出した。 ・今も何かと祖母を頼りにしている自分に気づいた。 ・自分が責めた時の祖母の寂しそうな姿を思い出した。	全体 全体 全体 ペア 全体	・「私たちの道徳」 P186～P189L8 ・祖母が変な格好をしている事への恥ずかしさ、家族と見られたくないという「僕」の気持ちに注目させる。 ・「私たちの道徳」 P189L9～P191L12 ・父からの話を聞いて、祖母の病気のことや、祖母に頼ってきた自分のこと、祖母の寂しそうな姿を反芻し、言葉につまってしまった「僕」の心情に注目させる。

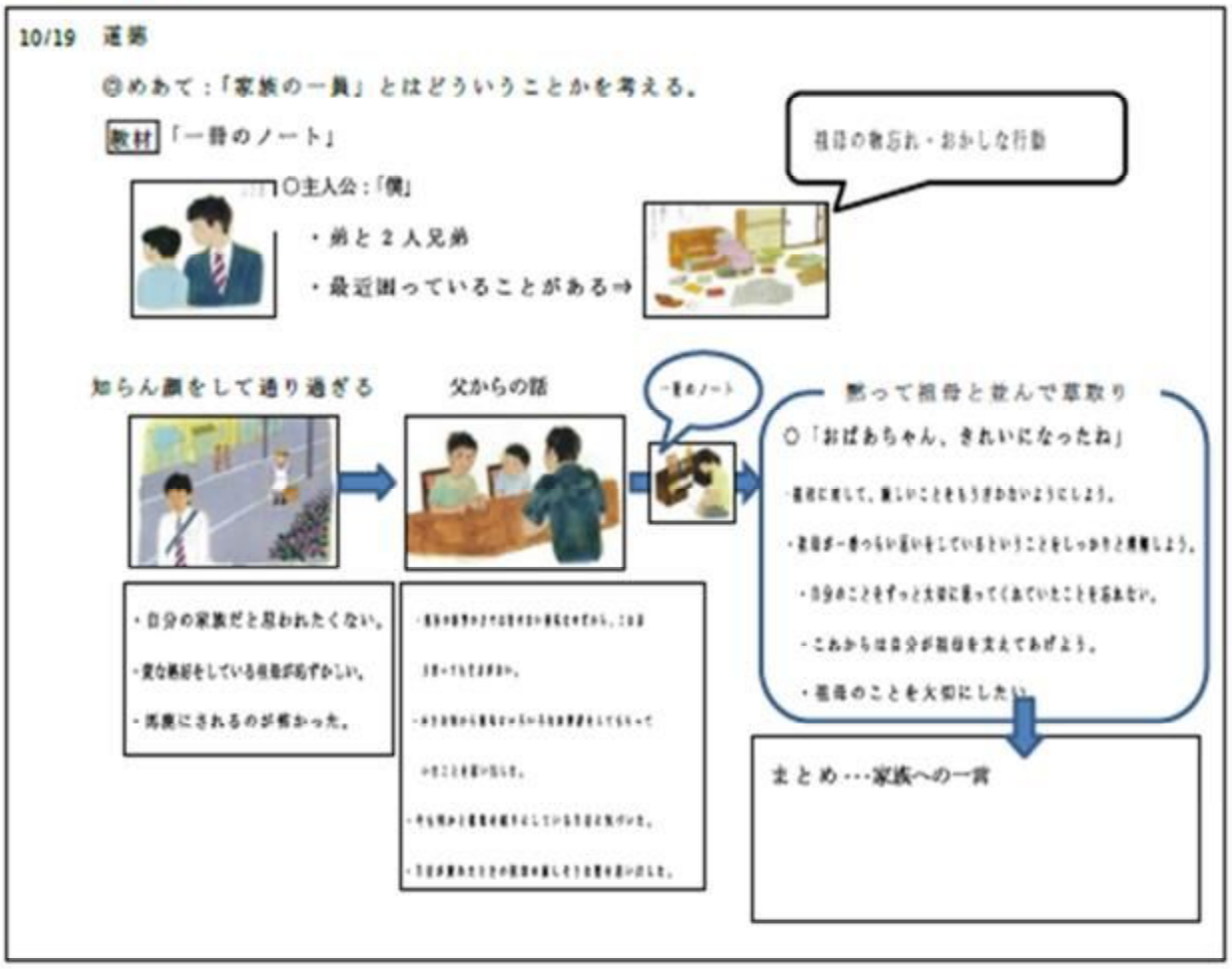
展開 後半15分	○「一冊のノート」を範読する。 ○主人公の内面に思考を追らせ、について、自分ごととして考える。 黙って祖母と並んで草取りを始めたときの「僕」は、どのようなことを心がけようと考えたのでしょうか。 ・祖母に対して厳しいことをもう言わないようにしよう ・祖母が一番つらい思いをしているということをしっかりと理解しよう。 ・自分のことをずっと大切に思ってくれていたことを忘れない。 ・これからは自分が祖母を支えてあげよう。 ・祖母のことを大切にしたい。	全体 個人 グループ 全体	・「私たちの道徳」 P191L13～ 【書く活動】 ・「私たちの道徳」の余白部分に直接記入させる。 【話す活動】 小グループ→全体 ◆祖母に対する主人公の思いに迫ろうとしている。 【書き込み・発言】
終末15分	○ゲストティーチャーからの話を聞く。 ○自分自身のことを振り返る。 今日、学校から家に帰って家族に一言伝えるとしたら、あなたは何と言いますか。 どうして、その言葉を書こうと思ったのですか。	全体 個人 全体	・教室に入ってもらう。 【書く活動】 ・「私たちの道徳」P193 【話す活動】 ・数名を指名し、発表させる。

8．評価

（1） 本時の授業は、生徒の思考をスムーズに働かせるものであったか。

（2） 本時の言語活動、指導過程、学習形態はねらいに迫る上で適切であったか。

９．板書計画



《引用参考文献》

・「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」　文部科学省
・「私たちの道徳 中学校 活用のための指導資料」　文部科学省

【補助教材】　「生徒アンケート」……別紙１

【本時の中心教材】

・「一冊のノート」（「私たちの道徳 中学校」　文部科学省）……別紙２

別紙１

家族アンケート

２年Ａ組　出席番号　　番

１．あなたの家族の形態を教えてください。
アーウの記号に○で囲んでください。

ア　核家族　　イ　直系家族　　ウ　複合家族

２．あなたの家族の人数をしえてください。（自分を含めます。）

（　　）人

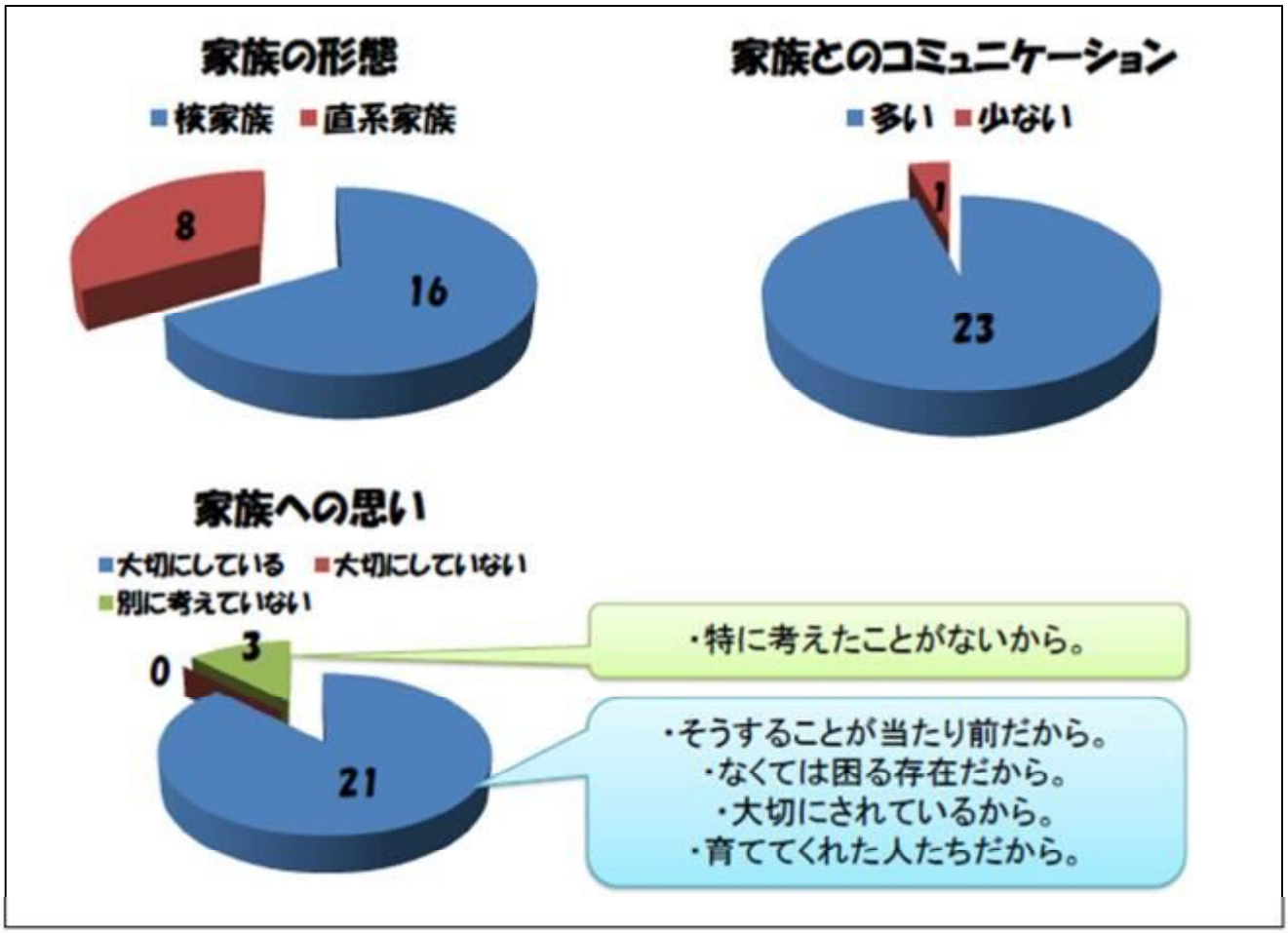
３．あなたは日頃家族と会話をしていますか。
あてはまる語句を○で囲んでください。

毎日　　時々　　全然していない

４．あなたの家族に対する気持ちを教えてください。
アーウの記号に○で囲んでください。

①　ア　大切にしている。　　イ　大切にしていない。　　ウ　別に考えていない。

②　上記のア・イ・ウの理由を教えてください。


家族の形態
核家族
直系家族
8
16
家族とのコミュニケーション
多い
少ない
1
23
家族への思い
大切にしている
大切にしていない
別に考えていない
0
3
21
・特に考えたことがないから。
・そうすることが当たり前だから。
・なくては困る存在だから。
・大切にされているから。
・育ててくれた人たちだから。

各授業実践の反省　～各研究協議より～

江部乙小学校　倉本 昌和　教諭の授業

○指導の工夫について

①教材提示の工夫

・教材を４つの場面に分割したことで、共通に認識すべき点（人物の立場、ストーリーなど）がしっかり押さえられた上での意見交流になっていたと思う。

・場面に焦点化して考えさせる上で、①状況が明確になる　②余計な情報（先の展開など）が入ってこない　ので自分なりの思考を働かせることができ、効果的であった。

・分割した提示方法は、心情の揺れや変化を考えさせる上で有効だったと思った。

②ワークシートの工夫

・子どもたちの考えを直筆で見た上で（保護者が）感想を書けるのはとても効果的だと思う。保護者の方からどんな感想が寄せられるのかが楽しみだ。

・自分の考えをしっかりと書けており、家庭との連携もとりやすい。

・参観日などで使ってみたいと思いました。

○授業全般について

＜導入＞

・始めに登場人物の確認をすることで、子どもたちは物語に入りやすくなったと思う。

・イラストを提示したことにより、物語をイメージしやすくしていたと思う。

・競技における勝敗について、もう少し時間をかけ、勝利するためにはどうすればよいか、子どもたちに揺さぶりをかけてもよかったのではないかと思う。

＜展開＞

・「勝ちたいんじゃないの？」という揺さぶりがあったり、子どもの発言に対して、「そう（ある）かもしれないよね」と断定的な言い方をしなかったりした点がよかった。

・発問に対して答えに窮する子どもの姿を見て、とっさにペアで話し合いをさせた対応がよかった。

・ワークシートに記入できた子から次々と発言させる手法はよかった。全員を待ってからではどうしても作業差が生じる。また、なかなか意見を書けない児童も、友達の発言を聞くことでヒントを得ることができる。

・ペアや小グループで考え方を交流することはとても効果的である。本時でも、それを行ったあと、急に活発な発言になった。

・とも子さんだけに視点をあてるのではなく、ひろしさん、光夫さんにも視点をあてて考えさせると、「仲間を大切にするとはどういうことか」が一層明確に浮かび上がってきたのではないか。

＜終末＞

・先生が話したエピソードと今回のことが結びつかなかった子も始めはいたと思うが、具体的な場面を紹介したことにより、実生活に結びつき、気付きにつながっていたと思う。

・身近で起こったこと（子どもたちが知っていること）で語りかけたことが、本当に温かく感じた。

・身近で具体的で個人が光ることで、『クラス全部がいい！』と思えるようなすばらしい語りだったと思います。温かさが感じられた。

滝川第三小学校　惣戸 信明　教諭の授業

○指導の工夫について

①教材提示の工夫

・適切な場面分けで提示されていたので、子どもたちは不必要に先読みすることなく、思考が焦点化されていた。その上、場面ごとに考えるべき課題が明確で、子どもにとって楽しい内容であったため、登場人物の思いや変容に対し、スムーズにしっかりと共感できる流れであった。

・板書については、思考の流れがわかりやすくなっており、後から振り返ることができるなど、一時間の授業が可視化されていてよかった。

・起承転結型の教材であったことから各場面に思考するポイントを焦点化する上で大変効果的であった。

②自己評価とそれを生かす手立て

・１度目の自己評価がとても自然な流れで、児童の日常の姿がよく出ていてよかった。素直な気持ちを発言している様子があった。２度目については、教材からうまく離れることができていない子どももいたが、ほとんどの児童が自身の生活につなげられていたと思う。

・１度目のお手伝いの自己評価では、自覚がなく何となくという感じであったのが、ブラッドレーとお母さんの請求書とを重ねて振り返ることにより、２度目の自己評価では思いをもったものに変容していたし、子ども自身がその変容を感じ取ることができたようだ。

・これからのお手伝いについて（２回目の自己評価）考える場面で、パッと書けていた児童と全く書けていない児童との差が大きいと感じた。１時間で学習することを自分ごととしてどれだけ引き寄せられているかの差のように感じた。いかに本時に気づかせたい道徳的価値を、自分ごととして捉えさせるかという点が重要であると感じた。

○授業全般について

＜導入＞

・子どもたちの素直な現状が交流できる投げかけや受け止め、学級の雰囲気が素晴らしかった。

・子どもたちの日常を振り返らせながら、学習課題に迫らせるとともに、話しやすい雰囲気づくりにも成功していた導入であった。

＜展開＞

・「お母さんからの請求書」の金額を伏せておいたのは、子どもたちの反応を見ても大変効果的であったと思った。

・場面ごとに課題がはっきりとしていたので、子どもたちが賑やかに声を上げても思考が焦点化される展開になったと思う。

・母からの請求書の０ドルに込められた思いについて、もっと話し合わせるなどして考えを深められるとよかった。

＜終末＞

・お母さんの請求の内容が「大変」なだけでなく、「家族のため」である事への気付きは、先生があえて深追いしなくても気づける子が多かった。それが手伝いの枠を超えて「いたわり」という形で表れた。例えば、『お母さんが帰ってきたらストーブで暖めてあげる』『楽にしてください』といった感想が出ていた。

・教師の言葉でまとめなくても、子どもの気付き、変容を共有することをまとめとしてもよかったのでは、と思った。

江部乙中学校　丸山 治樹　教諭の授業

○指導の工夫について

①「書く活動」「話す活動」の重点化

・発表は少なかったが、「父の話」から「僕」の気持ちを考えさせる際、ペア等による話し合いによってより考えを深めることができていたと思う。

・文章を小分けにして内容を把握させる一助とする形式は、これまでの研究の流れもありよかった。ただ、今回は分けすぎたのか、文章自体も長かったためか、時間がかかっていて「書く」「話す」活動に割く時間がとれなかったように思う。

・活動が多かったと感じました。展開前半の活動はカットしてもよかったと思った。

②ゲストティーチャーの活用

・生徒たちにとって、自分たちがこれまで多くの方に「大切に見守られてきた」ということがよく伝わるすてきなスピーチだった。

・『家族ではない方の言葉を、子どもたちはどのように受け止めるのだろう？』と思っていたが、とても重く受け止め、心に響いた様子が伝わってきた。教材文を補強して余りある教材になっていて、すばらしいと思った。

・担任からは当たり前すぎて語りきれない大切なことも、ゲストティーチャーだったら真正面から語ってもらうことができ、子どもたちの心にもしっかり届くのだと思った。

・情操を高めるうえで大変効果的であった。

○授業全般について

＜導入＞

・アンケート結果を見て、自分たちが今どうなのかを振り返らせるとともに、テーマに関心を持たせる上で効果的であった。

・家族との関係についてもう一度考え直してみる、という課題提示はわかりやすかった。

・時間を圧縮したシンプルな導入であった。

＜展開＞

・「君たちも同じかい？」「理解できる？」と教師が適宜声かけをしていたので、子どもたちは頷き等の反応をして、教材から自分自身のことへの転換が図られていた。

・前半は主人公の祖母への憤りなどに焦点が当たり、そしてそれが当然のものであると思わせることが大切だったように思う。そして後半では、焦点が祖母の現状への思いやりや、これまで自分が受けてきた愛情の振り返りを通して、家族愛の大切さに気づく（変容）流れとするとよかったのでは。この振れ幅が大きいほどよかったと思う。

・指示が抽象的で、子どもは『何について』書いたり話し合えばよいか困惑する場面があった。

＜終末＞

・子どもたちの視線が、ゲストティーチャーにしっかりと向かっていたのが気持ちよかった。

・ゲストティーチャーによって、子どもたちの印象はより強まった。子どもたちもとても真剣に話を聞いていた。

・核家族で祖父母の煩わしさを知らない子も多い中、教材文で理解したことがゲストティーチャーの言葉によって「こんなにも自分たちを見ていてくれる存在」への意識に自然と転換され、「自分を思ってくれている家族への一言を考える」という終末へと大変自然な流れとなっていてすばらしかった。

第４章
成果と課題

平成２８年度　滝川市道徳教育推進事業　研究の成果と課題

＜研究内容に係る成果と課題＞

研究内容	成　　果	課　　題
①心に響く教材の開発・活用の工夫	教材収集 ・今年度は３つとも「私たちの道徳」の教材文を使用していた。学級の実態や考えさせたい内容を踏まえて選択されていたと思う。 ・児童生徒の身近な問題を考える教材であり、より児童生徒にとって共感できる教材が扱われていたと思える。 ・今年度は「私たちの道徳」の教材を使っていたので、教材開発の面では難しくなく取り組みやすかったように思う。 ・「私たちの道徳」の読み物教材を土台にしながら、児童の実態や指導のねらいを踏まえ、補助資料や人材活用などが効果的に行われた。既存の教材を、自分の学級で扱う際の参考になる実践であった。 ・基本的に本年度は、「私たちの道徳」を読み物教材の中心に行えたことで、それを活用した指導方法の研究が深まった。 ・地域の方を方のお話を頂く、地域人材の活用ができた。 ・ゲストティーチャーを招くなどの工夫があった（話の内容も含めて） ・児童の実態に合い、日常生活を振り返ることのできる教材が使われていた。 副読本・私たちの道徳の活用 ・これから何度も使われると思われる定番教材の授業を検討する機会がもててよかった。	教材収集 ・副読本以外の素材（書籍、映像など）を用いた実践も見てみたかった。 ・本格的に教科化される時には、年間３５時間分の教材を教科書だけでまかなえるわけではないと思うので、学年別や観点ごとなどそれぞれ教材の発掘、整理が必要ではないか。 ・江部乙中の人材活用の提案は、教材開発の例として素晴らしいものではあったが、労力が大きく、日常の授業には取り入れるのは難しい。写真、動画や読み物等は教材化しやすいと思われるが、人材活用については難しいという点が課題として残った。 ・児童の実態に応じた教材の提示と、心に響く教材の開発が今後も必要。 ・独自の地域教材などについても取り組む場面があってよいのではないか。 ・「私たちの道徳」以外に、もっと生徒の身近な資料を活用することも有意義だと思う。そのための教材の収集を積極的に行わなければならない。 ・「私たちの道徳」以外の効果的な教材での実践があると、より教材収集が深まったのではないかと思う。 素材の性格に着目した教材化 ・“教材文を読む→内容を確認する→その内容について自分なりに考える→発表・交流・深める”が大雑把な流れだが、前半の“内容の把握”までに時間がかかる（子どもの理解の差もある）。課題について子ども自身の考えをまとめ、深めることが大切であるのに、教材文の登場人物の心情を理解することだけでかなりの労力を使う。副読本の教材文の内容・文章の長さは、１時間の授業で扱うには適切なのかどうか吟味することが必要ではないか。 ・教材文が長いものでは、範読する時間が長くなり、児童生徒の活動が制約されてしまう。 ・学校生活を取り扱った教材であれば良いのであるが、家庭生活に踏み込んだ教材については、児童生徒の境遇を十分配慮し取り扱わなければならない。 副読本・私たちの道徳の活用 ・副読本の内容提示の仕方と、効果的利用法についてさらに追究が必要。

	指導過程の特質に応じた指導の工夫（導入・展開・終末） ・読み物教材の読解に終始せず、児童自身の生き方や考え方に引き寄せる指導過程の在り方が検討され、日常の授業のモデルになるものであった。	
	「展開」における教材の魅力を引き出す発問の工夫 ・どの授業も様々な面で細部まで工夫されていた。特に発問の工夫により生徒の多様な考えが引き出されていたことに感心した。	「展開」における教材の魅力を引き出す発問の工夫 ・登場人物の心情の変化を子どもたちに理解させるのが学習課題ではない。よって、内容の把握に関する質問は、短い時間に的確に進められるように十分に吟味する必要がある。 ・教材について考える場面と、教材から離れ児童自身に引き寄せて考える場面との違いについては、展開や発問の仕方など、もう少し検討していく必要があるのではないか。 ・自分で授業をしていて、いつもぶつかる課題だが、展開後半で自分の生活に置き換えて振り返る発問に難しさを感じる。スムーズに振り返られる教材もあれば、内容をなかなか自分ごととして結びつけづらい教材もあり、発問の在り方に悩むことが多い。
	児童生徒の実態把握（道徳性アンケート等） ・児童生徒の実態把握アンケートは、授業構想を立てる上でとても大切であるので、継続が必要だと考える。 ・アンケートに基づく授業実践がされており、成果があった。	
	教材提示の工夫（導入段階における提示、読み物教材の分割提示等） ・分割提示は、思考の焦点化に大変有効だった。 ・分割提示された先の話を知っている子がいても授業のねらいがしっかりしていれば、対処出来ることがわかった。 ・副読本を分割し、読み聞かせることにより、児童生徒が主人公の心情の変化を的確に捉えることができたと思う。 ・物語を分割して提示することで、その内容の把握がより容易になっていた。 ・教材を分割して提示する手法は、児童を授業に引き込むために有効であると確認できた。 ・読み物教材の分割提示は、段階的な思考、焦点化、揺さぶり等々、ねらいに迫るために簡単で重要な方法であることが改めて確認できた。 ・読み物教材の分割提示は、効果的であることがわかった。 ・読み物教材の分割提示を多く取り入れ、それが子どもの考え方の深まりに寄与した。	教材提示の工夫（導入段階における提示、読み物教材の分割提示等） ・既に教材を知っている子がいる場合の分割提示の難しさを感じた。 ・教材を分割することは有効な手段だが、提示の仕方に工夫が必要だと感じた。

	・教材を分割して提示することで、誰のどの場面の気持ちについて考えるのか、などが明確になり、思考の順序がわかりやすくなっていた。 その他 ・教材の内容を絵で表し、視覚に訴えることで、児童生徒の集中力も持続しているのではないかと考えられる。 ・挿絵や登場人物を黒板に貼ることで、板書を見ただけで授業の流れがわかるように工夫されており、板書の大切さも改めて感じた。 ・課題に迫るために、教材の提示の仕方やどのような発問が効果的かを議論し深めることができた。 ★今年度の実践では３本の研究授業ともに「私たちの道徳」の読み物教材を使用した実践が行われた。配布から３年経つものの、読み物教材と書きこみ部分をどのように効果的に授業化するかといった点がなかなか研究の俎上に上がってこなかった経緯を考えると、意義のある活動ができたと考えられる。 ★今後、道徳が教科化された際には教科書を使用することになるが、全ての学校にすでに配布され、共通で使用している教材をどのように指導していくかという研究を進められたことは、これから各校で道徳科の研修を進めていく上での１つのモデルとなる研究であったといえる。 ★「道徳性アンケート」は児童生徒の実態の把握をし、内容項目の設定を明確にする上から有効な方策であり、今後も継続して行うとともに、各学校の日常実践でも活用してもらえるような働きかけをしてみる価値があると考えられる。 ★授業の前後に「道徳性アンケート」を実施したことで、授業を通した児童生徒の意識の変容を考察することができた。	その他 ・他教科の学習から、道徳でも教材の結末を踏まえて「正しい答え」を見つける授業だとの意識はやはり根強い。道徳は教材をもとに「考えること」に重きがある授業だと、児童生徒が理解できている下地作りも今後は大事なポイントになると考えられる。 ★児童生徒の実態や指導する内容項目に応じた教材収集･開発という点からの研究は進まなかった。今後は教科書をベースとした指導をしていくことになるが、（参考資料として提示するなどの方法も含めた）１時間の授業を通して子どもたちがよりよく考え、議論を深められるような教材の収集・開発を次年度、一層意識して取り組んでいくこととする。 ★新聞記事、動画など、効果的な教材の収集と活用を進めていく。 ★小学校高学年から中学校の長文教材をどのように取り扱っていくことが効果的か（児童生徒に思考させる観点から、授業時間上から）検討する必要がある。 ★次年度は、指導案検討の際に一層「発問の在り方」について検討を重ね、今後求められる『考え、議論する道徳』の姿を明らかにしていくこととする。

	★教材の分割提示は、児童生徒の教材に対する内容理解を容易にし、段階的な思考を促す授業展開を可能とする効果的な教材提示手法として押さえたい。 **★児童生徒の思考を促し、その跡が見える構造的な板書の在り方については、今後もさらに実践と検証を進める。** **★「指導過程の特質に応じた指導の工夫」や「展開における教材の魅力を引き出す発問の工夫」についても、日常の実践に還元できるような研究を推進することができた。**	
②言語活動の充実を図る指導方法の工夫	自分の考えを明確にさせるための書く活動 ・書く活動は、自分の考えを明確にすることにつながっていた。また、交流する準備段階としても重要であった。 ・「どうして、なぜ」と問われても書けない子が多い。お話の続きや、自分だったらどうするかを問うことで、「どうして、なぜ」の答えを引き出せるように感じた。 ・自分の考えを書かせるために、ワークシートを活用することは有効である。 個々の考えを広げ、深めるための話合い活動の工夫 ・個人の持っているイメージをさらに広げたり、深めたりするためにも考えを伝え合う活動は大変有効であることがわかった。 ・個人→グループなどといった段階に工夫されており、自分の考えを明確にした上で交流することで、自分の考えをさらに深めることができていた。	自分の考えを明確にさせるための書く活動 ・自分の考えをまとめる（整理する）十分な時間の確保が必要。 ・他者の意見を聞いて自分の考えの変化を記入するなど、ワークシートの内容を工夫する余地はまだある。 個々の考えを広げ、深めるための話合い活動の工夫 ・言葉不足の子どもの発言を深めたり、一人のつぶやきを全体へと広めたりするには、教師の切り返しが大切だが、そこを指導案や実践発表で伝えるのが難しい。 ・他教科のように練り合いやよりよい方法を目指す話し合いではなく、互いの違いに触れ自分の考えを広げ深めることを目的とする話し合い活動とすることに留意が必要である。そのためには発問や支援の工夫、話し合い活動の目的への理解や慣れなどが必要と考えられ、その研究も課題の１つではないか。 ・どのような話し合い形態が有効であるか、今後も研究が必要。

	「書く活動」「話す活動」を生かした指導過程の工夫 ・ペア、グループ、全体など、話す活動のバリエーションが大切だとわかった。 ・「書く活動」、「話す活動」をバランスよく取り入れることができていた。 ・主として、１次的な考えを示す場面や終末における考え方の変化や深まりを指導過程に位置づけ、効果的であった。 ・話し合ったり、意見を発表し合ったりするなどの工夫が見られた。 ・どの授業も「書く活動」「話す活動」が自然な形で行われ、児童の素直な意見が出されていた。 その他 ・どの研究授業にも、児童生徒の言語活動を重んじた授業となっていたと思われる。 ・どの研究授業でも、子ども同士の対話やそれをもとにした話し合い、または自分の意見を書くことなどの方法が効果的に用いられた。 ★「書く活動」と「話す活動」のねらいをはっきりさせた授業づくりを推進することができたため、１時間で考えさせたい道徳的価値に迫っていける活動となっていた。 ★時間配分など、今後も検討する余地を残す点もあったが、「書く活動」と「話す活動」を意図的・計画的に指導過程に位置づけることは、児童生徒の思考を整理したり、考えを深めたり広げたりする上で効果的であった。 ★今年度は導入の時間を大幅に圧縮することで、展開における「書く活動」や「話す活動」にかかる時間を保障したり、活動の充実を図ったりした。この手法は次年度以降も継承していくこととする。	「書く活動」「話す活動」を生かした指導過程の工夫 ・終末の活動で、何も書けずに終わる子がいなくなるような手立ても研究するべきと感じた。 ・考える時間、まとめを書く時間、ペアやグループでの話し合う時間、全体での発表する時間など時間の確保が必要である。 ・その授業の中で「書く」目的は何かを明確にする必要がある。 ～自分の考えを整理させるために書く →　ワークシートなど ～発表のために書く →　掲示用の短冊など ・どの場面で、どのくらい話したり書いたりするかは今後も研究が必要。 ★自らの思考の変容をたどっていけるようなワークシート作成･使用など、「書く活動」を通した授業内容の深化を図る工夫についての研究に取り組んでいく。 ★研究における「話す活動」は、多様な考え･意見に触れながら道徳的価値を多面的･多角的に学び、気付いていくために行う活動と押さえたい。（活動の意味の整理） ★次年度は「書く活動」と「話す活動」に関わるねらい･目的を明確にさせるための議論を指導案検討段階で一層意識して行う。 ★活動のねらいを明確にさせることとあわせて、「書く活動」と「話す活動」にかかる時間の検討も行う。

③保護者や地域の方などの支援を得た指導の工夫	・ゲストティーチャーに１時間全てをお願いするのではなく、担任が組み立てた授業の中で語っていただく形でも、しっかりねらいに迫ることができた。 ・ゲストティーチャーの活用により、教材の深化が図られていたと思う。 ・地域の人材を活用した実践が行われ、これについて研究協議できたことが良かった。 ・学校外の方の話を聞くことで、子どもたちの課題に対する考えがより深められた。 ・ゲストティーチャーによる生の言葉は児童生徒の心に響くので、とても効果的であることがわかった。 ・児童にとって身近な方である程、児童自身に引き寄せる効果は大きく、ねらいにせまるものになり得ることが改めて確認できた。 ・ゲストティーチャーの取組は、大変効果的であった。 ・地域人材を終末に位置づけた今回の取組は、子どもの心に余韻を残す良い活用例であった。 ・ゲストティーチャーを招いた授業を参観できたことは、手間を考えると大変だったと思うが、とても勉強になった。 ・学習内容や話す内容が明確であったため、生徒によく内容が伝わった。 ・コメント欄を設けたことで、保護者に内容を理解してもらえる機会となったのは良かった。 ・ワークシートに保護者からのメッセージ欄を設けていたことは、大変参考になった。 ・学級通信などで、生徒の考えなどを保護者へ発信することから始めていきたいと感じた。 ・「私たちの道徳」の子どもの記録とそれに関する保護者のコメントを記してもらうことは指導の深まりを得ることであった。 **★今年度の実践においても、江部乙小学校における取組で学校と家庭との双方向の関係性構築の取組が行われた。ワークシートや私たちの道徳を活用し、学校での取組を発信、さらに各家庭の考えを受け止めてそれを再発信することから、同一歩調で子どもの心を育てる素地が築かれるものと考えられる。効果的な取組といえる。**	・授業のねらいに迫るように、ゲストティーチャーに参加していただくには、綿密な打ち合わせが必要なことがわかった。 ・授業者として子どもたちに考えさせたい内容と、“講師”としてきていただいた外部の方が話したいこととのすりあわせが必要。事前の打ち合わせが重要と考えた。 ・「その人の価値観」に関わる授業であるため、学級の子どもたちの保護者を外部講師として来ていただくには、その内容が適切かどうかの吟味が必要。 ・ゲストティーチャーとなる人材確保が困難である。（人材バンクの確立が必要） ・地域素材や、人材を活用するためにも「地域人材バンク」等の整理が必要。 ・ゲストティーチャーになりうる人材の掘り起こしや協力してもらえる体制作りなどの課題は大きく、教師個人では取り組みが難しい。 ・直接的な関係性によって生じる難しさ（個別の問題、心理的なしがらみ等）から、多様な考えの表出を制限する可能性もおおいにあることは考えなければならない。 ・どの学校、どの学級でも日常的に取り入れられる工夫とはなかなかならない。 ・地域に根ざした人材の発掘をどう進めるかを、様々な機関との連携が必要である。 **★外部人材の活用の有効性について確認されたと同時に、人材の確保の難しさについての指摘が多かった。今後、外部講師の活用を進めていこうと考えるならば、内容項目に合致するお話をしていただけるような人材のリスト化が必要になると思われる。**

	★研究の視点とされていながらなかなか実践につなげられていなかった外部人材の授業での活用について、実践･検証が行われたことは今年度研究における大きな成果であった。 ★外部人材の活用については、 １．授業のねらいを踏まえたお話をしていただくことが重要である ２．授業の一場面のみでお話をいただくことも有効である ３．読み物教材と自身の思いや考えをつなげる効果がある といったことが明らかになった。 ★外部人材の活用にあたっては、事前の打合せは欠かせない。一方、授業のねらいについて打合せをしっかりと行うことによって、児童生徒の心に響く効果的な教材となり得ることが分かった。	

滝川市道徳教育推進事業（平成２８年度）　研究の成果と課題

＜本事業全体に係る成果と課題＞

成　　果	課　　題
・午後からの研究授業だったので、学級担任でも参加しやすかった。 ・小中それぞれの実践について検討、交流することができて有意義なものであった。 ・研究の目的が明確であり、それに沿った授業研究が進められ良かった。 ・検討→授業公開→反省→…の流れが効率的で充実しており、大きな負担なく参加することができた。 ・一年の研究の流れがスムーズで、日程的に無理なく参加できる体制であった。 ・実践発表はとてもためになる。今後も続けていくべきであると思う。 ・３本の授業を見せていただき、充実した取組を行うことができた。	・この事業（研究会議）の目的には合わないのかもしれませんが、教科化への取り組みについても話題も提供されると助かったのではと感じました。 ・完全実施に向けての準備についての交流をもっと深めたい。推進日程や評価方法、学校ごとの取組の状況などを交流できたらいいと思う。 ・他の研究機関でも道徳の取組を進めていると思うが、重複する内容もあるのではないか。 ・滝川市は本研究会発足時の思いがあると考えるため、早急な見直しはどうかとは思うが、教科化も視野に入れた中で、研究主題の継続か変更かを一度はっきりさせる時期かもしれない。
★次年度も今年度の日程と同様のスタイルで研究を推進することとする。 ★ただし、次年度は４本の授業研究を行う必要があるため、うち１回は午前・午後にまたがる日程となる。	★小学校教科化前年度となるため、事務局方も積極的な情報発信を進めたい。 ★理論研修と第１回目の指導案検討の際には各学校の準備状況について交流する内容も盛り込む。 ★滝川市では平成１９年度から２年間は文部科学省指定事業として、平成２１年度からは市独自事業として道徳の授業研究を進めてきました。当初は「生命尊重」を重点とした授業実践を進めていたが、平成２３年度以降は次第に児童の実態に即した内容項目を重点とした指導を検証する、現在のスタイルになってきた。市で道徳事業をスタートさせたときの意義は大切にするべきだが、道徳教育をめぐる今日的課題にも十分対応していく研究とすることも本事業の大切な役割と考える。次年度は研究３年次となるため、テーマの見直しはしないこととするが、平成３０年度から研究テーマの見直しをすることも視野に入れる必要があると考える。

≪参考・引用文献≫

・　小学校学習指導要領解説　総則編　文部科学省
・　中学校学習指導要領解説　総則編　文部科学省
・　小学校学習指導要領　解説―特別の教科　道徳―　文部科学省
・　中学校学習指導要領　解説―特別の教科　道徳―　文部科学省
・　道徳教育の抜本的改善･充実　文部科学省
・　言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】　文部科学省
・　言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】　文部科学省
・　平成２２年度小・中学校教育課程編成の手引　北海道教育庁学校教育局義務教育課
・　平成２３年度小・中学校教育課程編成の手引　北海道教育庁学校教育局義務教育課
・　平成２７年度小・中学校教育課程編成の手引　北海道教育庁学校教育局義務教育課
・　平成２８年度小・中学校教育課程編成の手引　北海道教育庁学校教育局義務教育課
・　研究紀要１８６号　「豊かな心」を育む道徳教育の在り方　空知教育センター
・　研究紀要１８５号　「豊かな心」を育む道徳教育の在り方　空知教育センター
・　研究紀要１８２号　「豊かな心」を育む道徳教育の在り方　空知教育センター
・　研究紀要１８０号　「豊かな心」を育む道徳の時間の在り方　空知教育センター
・　第４６回北海道道徳教育研究大会空知・滝川大会　研究紀要　北海道道徳教育研究会
・　初等教育資料　平成２３年　７月号　文部科学省
・　初等教育資料　平成２４年　１月号　文部科学省
・　中等教育資料　平成２４年　２月号　文部科学省
・　学習指導要領の解説と展開　道徳編　教育出版
・　「特別の教科　道徳」ポイント解説資料　日本文教出版
・　平成２２年度滝川市道徳教育推進事業　実践報告書　滝川市教育委員会
・　平成２３年度滝川市道徳教育推進事業　実践報告書　滝川市教育委員会
・　平成２４年度滝川市道徳教育推進事業　実践報告書　滝川市教育委員会
・　平成２５年度滝川市道徳教育推進事業　実践報告書　滝川市教育委員会
・　平成２６年度滝川市道徳教育推進事業　実践報告書　滝川市教育委員会
・　平成２７年度滝川市道徳教育推進事業　実践報告書　滝川市教育委員会

滝川市いじめ根絶シンボルマーク最優秀作品

平成２８年度　滝川市道徳教育推進事業　実践報告書

「児童生徒の心に響く道徳科の授業の在り方」
～自己と他者の心を見つめて～

発　行　　平成２９年　３月
発行者　　滝川市教育委員会・滝川市道徳教育研究会議
所在地　　〒073-8686　滝川市大町１丁目２番 15 号
　　滝川市教育委員会　教育総務課
　　TEL 0125-28-8042　FAX 0125-24-1024